

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第31輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

せち ごと
清児遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第31輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

せち ごと
清 児 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



清見遺跡全景（北西より）



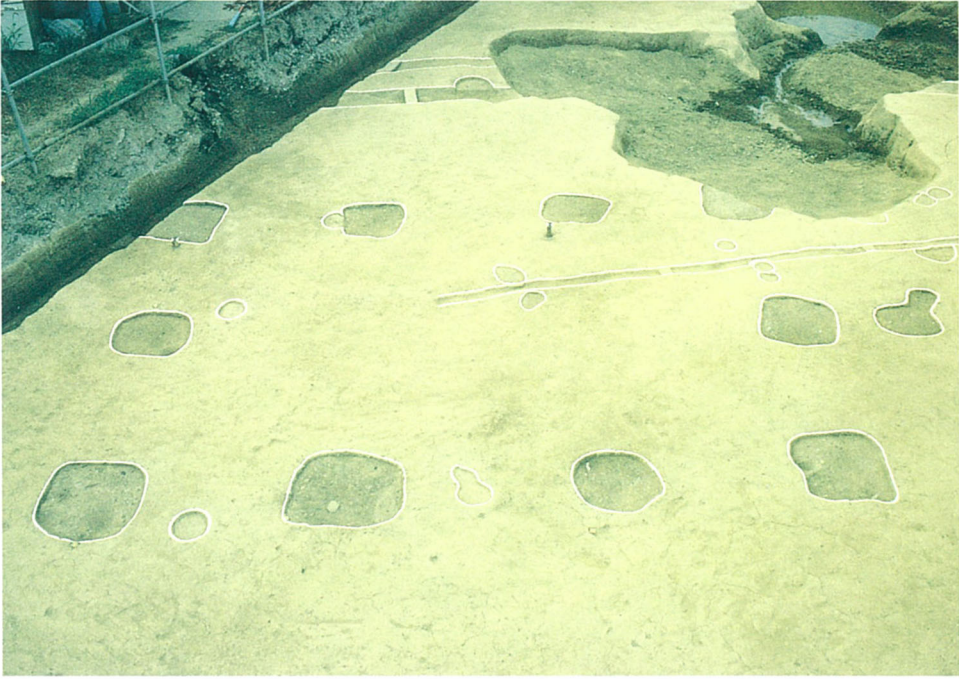
清見遺跡全景（南東から）



379-00出土土器



379-00遺物出土状況（北東より）



1002-O B 全景 (北東より)



Ⅲ B 区北壁土層断面

序 文

清兎遺跡は近木川右岸の中位段丘上、標高34～38mに立地し、地表面は良好な条里地割が明瞭に遺存することに加えて、奈良～平安時代の遺物が多量に表採されており、当該期の集落の存在が予測されていました。ところが、これまで、この地域において、調査らしい調査事例もなく詳細はほとんど不明でした。

今回の調査結果については本報告書に詳しく記述しているところでありますが、予測されたとおり、奈良～平安時代の掘立柱建物群を中心とした集落跡と13世紀以降の大規模な土地開発の始まりを示す条里坪界溝とみなされる資料等を得ることが出来ました。なお当該地域は、律令制下の和泉国和泉郡木島郷と日根郡近義郷に相当し、中世には清兎、名越、森、三松、水間集落を包括する木島谷域にはほぼ該当させられる木島庄に比定されます。今後、文献資料と発掘調査の成果を総合させた歴史構築が期待されるところで、本報告書がそれらの資料として大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年10月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は都市計画道路貝塚中央線建設予定地内に所在する清児遺跡^{せらご}の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師、森井貞雄、小山田宏一、橋本高明が担当し、昭和62年6月16日に現地調査を開始、昭和63年3月4日に終了した。引き続き実施した整理事業を昭和63年3月31日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。
5. 調査及び報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、南川孝司（摂河泉地域史研究会）、西岡巖（貝塚市教育委員会）の各氏から御指導、御教示を得た。記して感謝の意を表する。
6. 遺構写真撮影は調査各担当者、遺物写真撮影は小倉勝が担当した。
7. 調査は当協会の発掘調査規定により国土座標系第VI系を基準に地区割りを設定して行った。本文中及び挿図に用いた座標もこれに従い、座標数値はkm単位で記した。方位は座標北を示し、座標北より真北は東偏0度2分を磁北は西偏6度10分を測る。なお、標高はT.P.で表示した。
8. 遺物には通し番号を付し、本文中の遺物番号は、遺物実測図番号、図版遺物番号と一致する。
9. 本書で用いた土壌色、及び土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖5版』（1976）による。
10. 第1図は、国土地理院発行1：50,000地形図「岸和田」（1986）、第2図は陸軍陸地測量部発行1：20,000地形図「信太山」「貝塚村」「内畑」（1885）、第4・74図は大阪府都市計画地形図1：2,500をもとに作成した。
11. 本書の執筆は、担当調査区単位にI・III・IV区を森井と小山田が、II区を橋本が担当した。編集は小山田が担当した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	(小山田)	1
第2章 遺跡の位置と環境	(森井)	2
第3章 調査の方法	(小山田)	5
第4章 調査の成果	(森井・小山田・橋本)	8
第1節 層序		8
第2節 小調査区の概要		17
第3節 飛鳥時代		19
第4節 奈良時代～平安時代		21
第5節 鎌倉時代～室町時代		42
第6節 江戸時代		50
第5章 まとめ	(小山田)	58

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/50000)	1
第2図 遺跡分布図 (1/50000)	3
第3図 大阪府地域計画図の図割り	5
第4図 区割りと小調査区位置図 (1/2500)	6
第5図 北壁断面図 (1/120)	9～10
第6図 北壁断面模式図 (水平1/800, 垂直1/80)	11～12
第7図 第Ⅲ層出土土器 (1/4)	14
第8図 第Ⅱ層出土土器 (1/4)	15
第9図 第Ⅱ層出土石器 (1/2)	16
第10図 375-OO出土瓦 (1/4)	18
第11図 637-OO出土鉄器 (1/2)	20
第12図 637-OO出土土器 (1/4)	20
第13図 637-OO平面・断面図 (1/60)	21

第14图	1001—OB出土土器 (1/4)	22
第15图	1001—OB平面·断面图 (1/60)	22
第16图	1002—OB平面·断面图 (1/60)	23
第17图	1002—OB出土土器 (1/4)	24
第18图	1003—OB平面·断面图 (1/60)	24
第19图	1004—OB出土土器 (1/4)	25
第20图	1004—OB平面·断面图 (1/60)	25
第21图	1005—OB平面·断面图 (1/60)	26
第22图	1006—OB出土土器 (1/4)	27
第23图	1006—OB平面·断面图 (1/60)	27
第24图	1007—OB平面·断面图 (1/60)	28
第25图	1007—OB出土土器 (1/4)	29
第26图	1008—OB平面·断面图 (1/60)	29
第27图	1009—OB平面·断面图 (1/60)	30
第28图	1009—OB出土土器 (1/4)	30
第29图	1010—OB平面·断面图 (1/60)	30
第30图	1011—OB平面·断面图 (1/60)	31
第31图	1012·1013—OB平面·断面图 (1/60)	32
第32图	1014—OB平面·断面图 (1/60)	32
第33图	1015—OB平面·断面图 (1/60)	33
第34图	ⅢA区西部柱穴群出土土器 (1/4)	34
第35图	ⅢA区西部柱穴群 (1/120)	35
第36图	ⅢA区东部柱穴群 (1/120)	35
第37图	ⅣD区柱穴群 (1/120)	36
第38图	275—OO平面·断面图 (1/40)	36
第39图	739—OO出土土器 (1/4)	37
第40图	377—OO出土土器 (1/4)	37
第41图	377·378—OO平面·断面图 (1/40)	38
第42图	379—OO平面·断面图 (1/40)	39
第43图	378·379—OO出土遺物 (1/4)	40

第44図	610-OO出土土器 (1/4).....	40
第45図	614-OO平面・断面図 (1/40)	41
第46図	347-OS出土土器 (1/4).....	41
第47図	347-OS平面図 (1/80)	41
第48図	483-OP出土土器 (1/4).....	42
第49図	32-OO出土土器 (1/4)	42
第50図	31・32-OO平面・断面図 (1/40).....	43
第51図	1-OS出土土器 (1/4)	43
第52図	1-OS平面図 (1/100)	44
第53図	146-OS断面図 (1/20)	44
第54図	473・474-OS断面図 (1/20).....	44
第55図	472-OS断面図 (1/20)	45
第56図	244-OS土器出土状況 (1/20)	46
第57図	244-OS出土土器 (1/4).....	46
第58図	87・135・244・288-OS断面図 (1/20)	46
第59図	I B・I C・III B区溝 I・II類平面図 (1/200)	47~48
第60図	236・235-OS断面図 (1/20).....	49
第61図	875-OX平面・断面図 (1/60)	49
第62図	588-OW出土遺物 (1/4).....	50
第63図	588-OW平面・断面図 (1/40)	51
第64図	616-OO出土土器 (1/4).....	52
第65図	641・654-OO平面・断面図 (1/60).....	52
第66図	641-OO出土土器 (1/4).....	53
第67図	616-OO・617-OS断面図 (1/60)	53
第68図	616-OO・617-OS平面図 (1/120)	53
第69図	617-OS出土遺物 (1/4)	54
第70図	I A区東部小溝群 (1/200)	56
第71図	I B区東部小溝群 (1/200)	56
第72図	現条里地割と中世期区画溝の位置関係図 (1/5000)	59

表 目 次

第1表	遺構の種類と記号	7
第2表	ⅢA区西部柱穴群計測表	60
第3表	ⅢA区東部柱穴群計測表	62
第4表	ⅢB・ⅢC区柱穴群計測表	63
第5表	ⅣD区柱穴群計測表	66

図 版 目 次

巻頭図版1	清児遺跡全景（北西より）、清児遺跡全景（南東より）
巻頭図版2	379-00出土土器、379-00遺物出土状況（北東より）
巻頭図版3	1002-0B全景（北東より）、ⅢB区北壁土層断面
図版1	清児遺跡周辺（木島谷）空中写真
図版2	I A区全景 I A区東部小溝群・I-OS全景
図版3	I B区全景 I B区東半部全景
図版4	I B区西半部全景 I B区87-OS全景
図版5	I C区全景 I C区1001-0B全景
図版6	I C区1002-0B全景 I C区建物柱穴
図版7	I C区288・244-OS全景 244-OS遺物出土状況
図版8	I C区235・236-OS全景 I C区1021-0F全景
図版9	ⅡA区全景 ⅡB区全景
図版10	ⅡA区1010-0B全景 ⅡA区1011-0B全景
図版11	ⅡA区1012・1013-0B全景 ⅡA区1014-0B全景
図版12	ⅡB区1015-0B全景
図版13	ⅢA区全景 ⅢA区東半部全景
図版14	ⅢA区1003-0B全景・柱穴
図版15	ⅢA区377・378・379-00全景 379-00遺物出土状況
図版16	ⅢA区347-OS全景 ⅢA区西部柱穴群全景

- 図版17 III B区全景 III B区244・288-OS全景
図版18 III C区全景 III C区柱穴群
図版19 IV A区全景 IV A区527-OO全景
図版20 IV B区全景 IV B区西端全景
図版21 IV B区1005-OB全景 IV B区1006-OB全景
図版22 IV B区1007-OB全景 IV B区建物柱穴土層断面
図版23 IV B区617-OS全景・土層断面
図版24 IV B区588-OW全景・石組
図版25 IV B区588-OW桐木 IV D区全景
図版26 IV D区小溝群全景 IV D区637-OO全景
図版27 I A区北壁土層断面 III B区北壁土層断面
図版28 II A区北壁土層断面 IV A区北壁土層断面
図版29 第III層、第II層、637・378・379-OO、244・617-OS、406-OP出土遺物
図版30 第II層、637・379-OO、588-OW、1009-OB出土遺物
図版31 第II層出土遺物
図版32 第II・III層出土遺物
図版33 1002-OB、32-OO、244-OS、1012-OB、1015-OB出土遺物
図版34 739・655・376・377-OO、405・386・396-OP、347-OS出土遺物
図版35 1006・1007-OB、610-OO、616-OO、588-OW出土遺物
図版36 617・621-OS、646・652-OP、1009-OB出土遺物
図版37 637-OO出土遺物

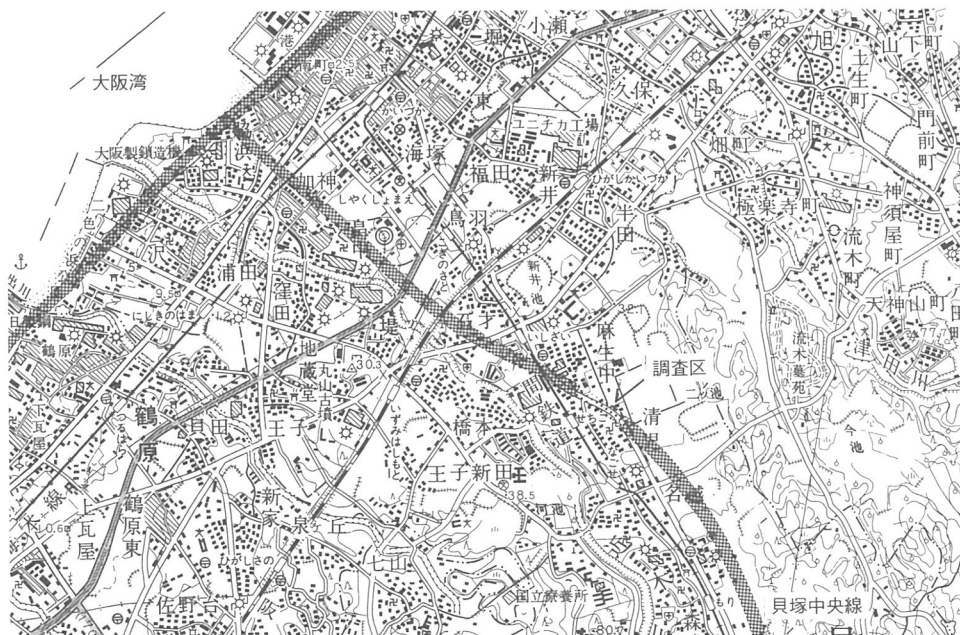
付 図 目 次

- 付図1 清兎遺跡構図(1) (1/200)
付図2 清兎遺跡構図(2) (1/200)
付図3 清兎遺跡構図(3) (1/200)

第1章 調査に至る経過

清見遺跡は貝塚市清見に所在し、大阪府文化財分布図によると本調査区の東方に広がる遺跡で、分布調査では奈良時代～平安時代の遺物が報告されている^(注1)。このたび本遺跡の西辺に接する府道牛滝貝塚線が都市計画道路貝塚中央線として拡幅されることになり、建設工事にあたって清見遺跡の当工事区への拡がり懸念されるに至った。これを受けて大阪府教育委員会文化財保護課と府土木部の間で協議が行なわれ、まず試掘調査により遺跡の拡がり調べることになった。試掘調査は当協会により、1986年12月から3月にかけて実施され、その結果、遺構および遺物包含層の存在が確認され清見遺跡が当地まで伸びることが明らかになった。この調査成果をもとに再度府教育委員会と府土木部とで協議がもたれ、当協会が府教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施することになった。当協会は岸和田土木事務所と1987年4月1日に委託契約を結び、現地調査は同年6月16日に着手した。

注(1) 元興寺仏教民族資料研究所『泉南丘陵地区遺跡に関する分布調査報告書』1973、ここでは清見遺跡を二ツ池東遺跡と呼称している。



第1図 調査区位置図 (1/50000)

第2章 遺跡の位置と環境

清児遺跡は近木川（コギガワ）右岸の中位段丘上に立地し、標高34～38mを測る。貝塚市域の平地部にはほぼ相当するこの段丘面は、三ヶ山丘陵と津田川、七山丘陵と貝田川に画され東西3km、南北5.5kmの北西に開く扇形を呈す。その南半部の丘陵に挟まれた幅2.5km、長さ3.5kmの谷地形は木島谷（キノシマノタニ）と呼ばれ、清児遺跡はその谷口付近に位置する。近木川は段丘面を下刻しつつ南寄り流れ、清児付近では川床と約7mの比高差を持つ。段丘面には起伏が見られ、近木川と津田川河口の間には、脇浜付近と貝塚寺内町付近から始まる2本の谷地形が南東に延びる。清児遺跡はその谷奥にほぼ当たる。なお遺跡と三ヶ山段丘との間にも浅谷が存在する。微高地には旧集落、溜池が立地している。

近木川流域の歴史的状況は、貝塚市史（1950年）に詳しいが、近年の考古学的調査で特に古い時期の様相が次第に明らかに成りつつある。それらを時代順に簡単に述べる。

旧石器時代は、海岸寺山、新井ノ池、脇浜遺跡でナイフ形石器や剥片が知られている。

縄文時代は、脇浜遺跡（晩期）が知られるのみでその間を欠いている。脇浜遺跡は海岸砂堆上に立地する。なお、畠中、ドビガ谷、森B遺跡などで縄文期と推定される石鏃が知られ、集落が存在した可能性がある。

弥生時代になると遺跡数は増加する。前期は、近木川左岸の沢遺跡（第Ⅰ様式新段階）と脇浜遺跡のみで、今のところ海岸部に限られる。中期には、畠中遺跡（第Ⅱ、Ⅳ様式）石才遺跡（第Ⅲ、Ⅳ様式の堅穴住居5棟、土坑墓）の他、木島谷の奥にも森B遺跡（第Ⅳ様式）が知られ、遺跡が段丘面上に広がったことを示している。他に麻生中新池、今池でも当該期の資料がある。後期では、新井ノ池、畠中、石才、脇浜遺跡が知られるが、第Ⅴ様式でも後半が主体となるようである。時期不詳の弥生遺跡には、沢新田、河池、半田、麻生中、窪田、海岸寺山、ドビガ谷などがある。

古墳時代には、前期には、畠中、脇浜遺跡で布留式期の遺構が知られ、特に後者は製塩土器、飯蛸壺の多さから漁村的な集落と推定されている。前期末から中期初頭には全長72mの前方後円墳の丸山古墳が近木川左岸に築かれる。中期では、堀遺跡（中期前半）で堅穴住居群が、今池遺跡（中後期）で溝が知られ、沢共同墓地遺跡（前期～中期前半）では製塩土器が多く出土する。丸山古墳付近の地藏堂遺跡では、墳丘の削平された中期後半の円墳が明らかになった。石才遺跡（中期末から後期）では掘立柱建物の倉庫群が検出され、



- | | | | | |
|----------------|----------------|-----------------|------------------|------------------|
| 1. 清見遺跡 | 17. 臨浜遺跡 | 33. 今池遺跡 | 49. 麻生中新池遺跡 | 65. 向山古墳群 |
| 2. 沢新出遺跡 | 18. 貝塚寺内町遺跡 | 34. 石才遺跡 | 50. 海岸寺山遺跡 | 66. 蛇墳古墳 |
| 3. 沢海岸遺跡 | 19. 泉州麻生塩釜出土地 | 35. 橋本遺跡 | 51. 海岸寺南須恵器窯跡 | 67. 落合城跡 |
| 4. 沢海岸北遺跡 | 20. 畑遺跡 | 36. 石才南遺跡 | 52. 海岸寺山須恵器窯跡 | 68. 丸山古墳 |
| 5. 明楽寺跡 | 21. 小寺遺跡 | 37. 積善寺城跡 | 53. 海岸寺山墳墓遺跡 | 69. 流木上山遺跡(銅鐸出土) |
| 6. 沢共同墓地遺跡 | 22. 岸和田古城跡 | 38. 王子遺跡 | 54. 海岸寺山古墳 | 70. 水源地遺跡 |
| 7. 沢城跡 | 23. 小瀬五所山遺跡 | 39. 下新出遺跡 | 55. 岡崎古墳群(半田古墳群) | 71. 森城跡 |
| 8. 瀬池遺跡 | 24. 土生遺跡 | 40. 千石堀城跡 | 56. 福塚古墳 | 72. 正法寺跡 |
| 9. 窪田遺跡(窪田廃寺) | 25. 堂浦廃寺 | 41. 千石堀城跡 | 57. 天神山古墳 | 73. 白地谷遺跡 |
| 10. 貝田遺跡 | 26. 細町遺跡 | 42. 河池遺跡 | 58. 天神山廃寺 | 74. ミケ山西遺跡 |
| 11. 地藏堂遺跡 | 27. 行合堂跡(観音堂跡) | 43. 高井天神廃寺、高井城跡 | 59. ニツ池遺跡 | 75. 森B遺跡 |
| 12. 地藏堂廃寺 | 28. 葵廃寺 | 44. 名越遺跡 | 60. 義大塚古墳 | 76. 森A遺跡 |
| 13. 丸山古墳 | 29. 半田遺跡 | 45. ニツ池遺跡 | 61. 大師湖遺跡 | 77. 森ノ大池遺跡 |
| 14. 堤遺跡 | 30. 麻生中遺跡 | 46. トビガ谷遺跡 | 62. 八代寺廃寺 | 78. ミケ山遺跡 |
| 15. 加治・神前・高中遺跡 | 31. 新井ノ池遺跡 | 47. 槍ヶ谷城跡 | 63. 半塚古墳 | 79. ミケ山城跡 |
| 16. 長楽寺跡 | 32. 新井鳥羽遺跡 | 48. 半田遺跡 | 64. 大山大塚古墳 | 80. 意我美神社遺跡 |
| | | | | 81. 水間寺遺跡 |

第2図 遺跡分布図 (1/50000)

館的な遺跡の可能性がある。畠中遺跡でも若干当該期の遺物がある。後期になると畠中遺跡で竪穴住居群が出現し、脇浜、半田遺跡でも6世紀後半以降に発展をみる。この時期の須恵器窯は、三ヶ山丘陵の先端に海岸寺山窯跡群、木島谷の近木川左岸に三松遺跡（窯）が築かれる。窯跡群の付近には海岸寺山古墳（円墳、横穴式石室）が位置する。時期不詳の散布地には、沢、下新出、麻生中新池、河池、沢西出遺跡がある。この地域は、集落遺跡に対して既知の古墳の数が極少なく、特に木島谷では開発が遅れていた可能性がある。

飛鳥～奈良時代は、7世紀代は畠中、堀、半田、森B、清見遺跡がある。また半田遺跡に近い秦廃寺は白鳳期の創建である。8世紀代は畠中、沢、清見遺跡で掘立柱建物群が知られ沢遺跡（8世紀後半）では柵に区画された建物群が明らかになっている。この時期の瓦を出土する遺跡は秦廃寺、畠中、堂ノ上廃寺が知られる。森B遺跡では、8世紀前半の大溝が大規模な耕地開発を物語る。水源池遺跡は、須恵器窯跡と想定される。時期不詳の散布地には、沢西北、沢海岸北、殿池、二ツ池がある。

平安時代は、前期には、畠中（9～10世紀）、堀（9世紀）、清見遺跡（10世紀）で掘立柱建物群が知られ、森の大池でも遺物を認める。特に畠中遺跡では集落範囲がこの時期に拡大し、その南に接して近義堂廃寺が所在する。後期には、殿池（12世紀中～後）で掘立柱建物群が知られる。瓦を出土する遺跡は長楽寺跡、窪田廃寺、地藏堂廃寺、水間寺、明楽寺跡（沢城跡）、高井天神廃寺（水煙片出土）があり、一定の間隔を置いて分布する。

鎌倉時代は、地藏堂廃寺、王子（12世紀後～13世紀前）、殿池、畠中（13世紀前半）遺跡で掘立柱建物が知られる。森B遺跡（12～14世紀）では荒廃した耕地の再開発が想定されている。13世紀から15世紀にかけての遺物は、いわゆる中世耕土の中に細片としてかなり普遍的に見いだされ、集落が広く散在すると共に土地開発の進行を伺わせる。

室町時代は、積善寺城跡、森城跡などの在地土豪の中世城郭の出現を見る。更に戦国時代には、貝塚寺内町をはじめ、沢城跡、高井城跡、千石堀城跡、三ヶ山城跡が加わるが、これらは、文献史料から全国統一を進める秀吉に対する根来、雑賀衆側の地元土豪を含んだ防御拠点であったことがしられる。

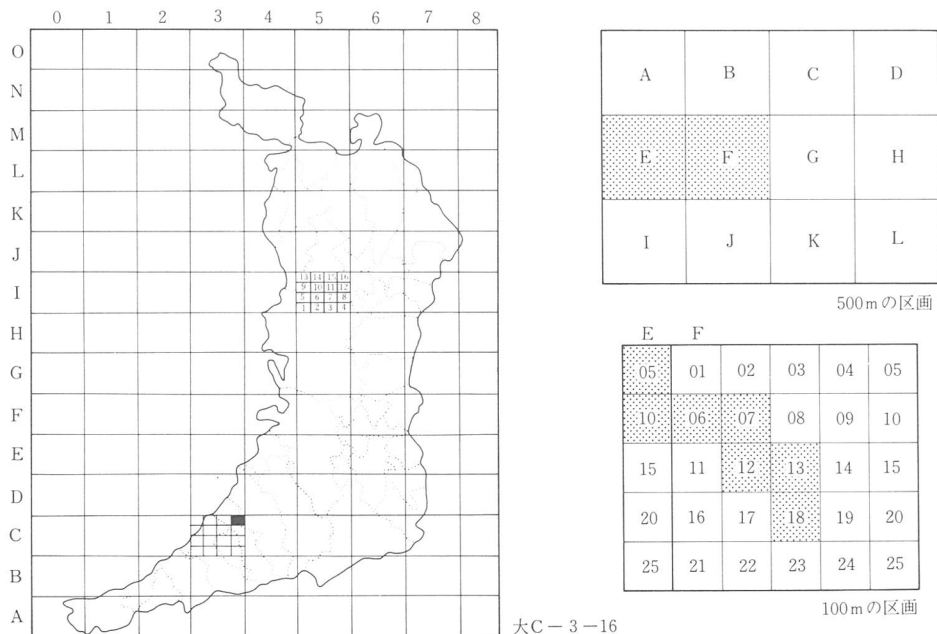
なお、当地域は律令制下の和泉国（設置は757年）和泉郡木島郷と日根郡近義郷に相当し、近木川下流部の兩岸旧南北近義村が日根郡に、その他が和泉郡に属した。中世に近義郷は高野山領近木庄に、木島郷は麻生庄と木島庄に分離した。木島庄は、清見、名越、森、三松、水間集落を含む木島谷域にほぼ該当する。今後、文献史料と発掘調査の成果を総合させた歴史構成が望まれるところである。

第3章 調査の方法

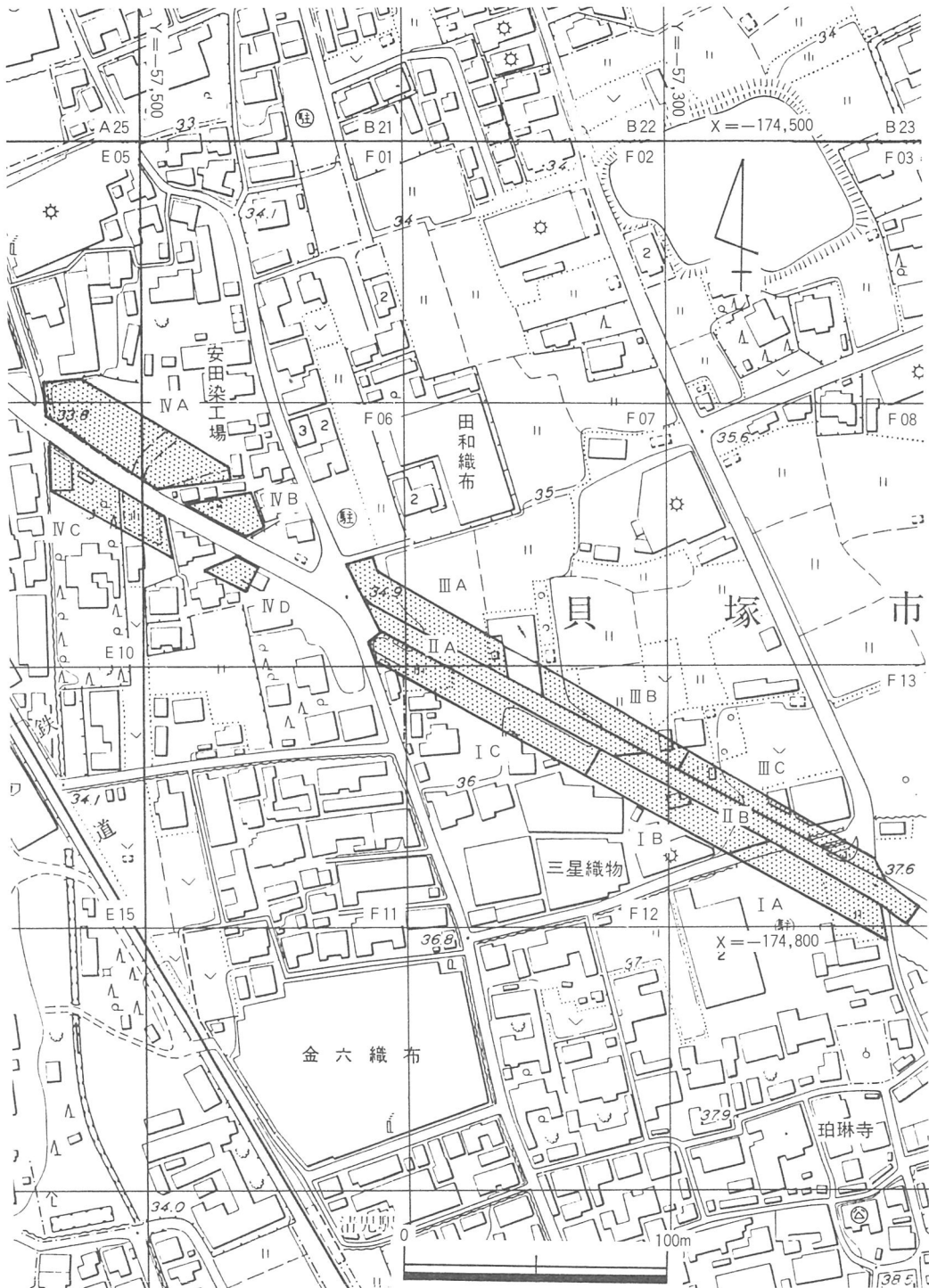
〈地区割と小調査区の設定〉（第3・4図）

発掘調査区は、道路建設予定地内に約400mにわたり設定されている。調査面積約6575 m²。調査区は、便宜上Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区の調査区に分けている。原則的に府道牛滝貝塚線調査部をⅡ区とし、その南側をⅠ区、その北側をⅢ区、そして調査区の残り西側をⅣ区と呼称している。更に進入路の確保等の都合上、Ⅰ区をⅠA・ⅠB区に、Ⅱ区をⅡ-1～3A・ⅡB-1～3区に、Ⅲ区をⅢA・ⅢB・ⅢC区に、Ⅳ区をⅣA・ⅣB・ⅣC・ⅣD区に分けている。報告での記述はこれに従う。

遺構の実測および遺物の取り上げには、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとにした4×4mの区画を使用している。まず本遺跡の所在する「大C-3-16」の1/2500地形図を12等分し500×500mの区画を作り、さらにこれを25等分し100×100mの区画を用意する。最終的にこれを625等分して4×4mの最小区画を設定している。これによると本調査区は「大C-3-16」の500m区画ではE・Fに、E・Fの100m区画においてはE05・E10・F06・F07・F12・F13・F18に位置する。



第3図 大阪府地域計画図の図割り



第4図 区割り和小調査区位置図 (1/2500)

〈調査の経過〉

調査はⅠ区から始め、Ⅲ区・Ⅳ区と進めた。次に、府道牛滝貝塚線が調査の終了したⅠ区とⅢ区に切り換えられた後にⅡ区の調査に入った。Ⅱ区の調査は府道の切り換え工事が2工程にわたる関係上、調査区をⅡ-1～3A・ⅡB-1～3区に分割し順次進めた。調査は全面発掘を基本としたが、埋積管の設置をみるⅡ区南辺、町道確保のためⅠA区西端およびⅢC区東端は隣接地の遺構検出状況を考慮した上で立会調査とした。調査区は構造物撤去時の攪乱が著しく、撤去物を埋めた攪乱抗が数多く存在していた。遺物包含層の残存率は低く、機械掘削が地山（基本層序第Ⅳ層）直上に及ぶ調査区もある。ⅣA・ⅣC区では遺構面の大半が消失し、Ⅱ区では現道の路盤工事による削平が著しく遺構検出面がⅠ・Ⅲ区遺構面より約15cm下っていた。しかし、掘立柱建物など遺構深度の深い類は検出されている。なお、Ⅱ区の一部とⅣB・ⅣD区では遺構の保存がはかられている。

〈遺構記号〉

本報では下記の遺構記号を用いる。

道 路	OA	溝	OS
建 物	OB	土器溜・瓦溜	OT
竪穴住居	OD	井 戸	OW
土塁・石塁	OE	苑 池	OY
柵・塀	OF	水田・畑	OZ
炉	OH	祭 祀	OC
水利施設	OI	窯	OK
土 坑	OO	池・沼	OL
ピット	OP	埋葬施設	OU
河 川	OR	その他・不明	OX

第1表 遺構の種類と記号

〈調査の目的〉

- ①清見遺跡は、元興寺文化財研究所の分布調査に拠れば奈良時代～平安時代の遺物が多量に表採されており当該期の大集落の存在が予測されている。本調査区は遺跡の西縁部に当たるが、試掘調査により当該期の遺構がこの地まで広がっていることが明らかにされている。従って、奈良時代～平安時代の遺構の検出とその実態の把握がひとつの目的になる。
- ②清見遺跡の位置する近木川右岸の低位段丘には条里地割が明瞭に遺存している。従って、条里地割に係わる地下遺構の検出とその施行時期の解明がひとつの目的になる。これは背景としての大規模土地開発がいつ始められたかを知る手掛りを得ようとするものである。

第4章 調査の結果

第1節 層序 (第5・6図 図版27・28)

今回の調査範囲は延長380mに及び、地表面の標高は西端でT.P.34.7m、東端でT.P.37.6mを測る。この間には3枚の微地形面が認められ、III A区東端に約1.2mの段差をもつが、基本的な層位には変化が見られなかった。調査では、遺構面下にもトレンチを設定し基盤層である段丘礫層上面まで層位の把握を行った。その結果、基本的に4層に大別された。

第I層 近代～現代堆積層である。

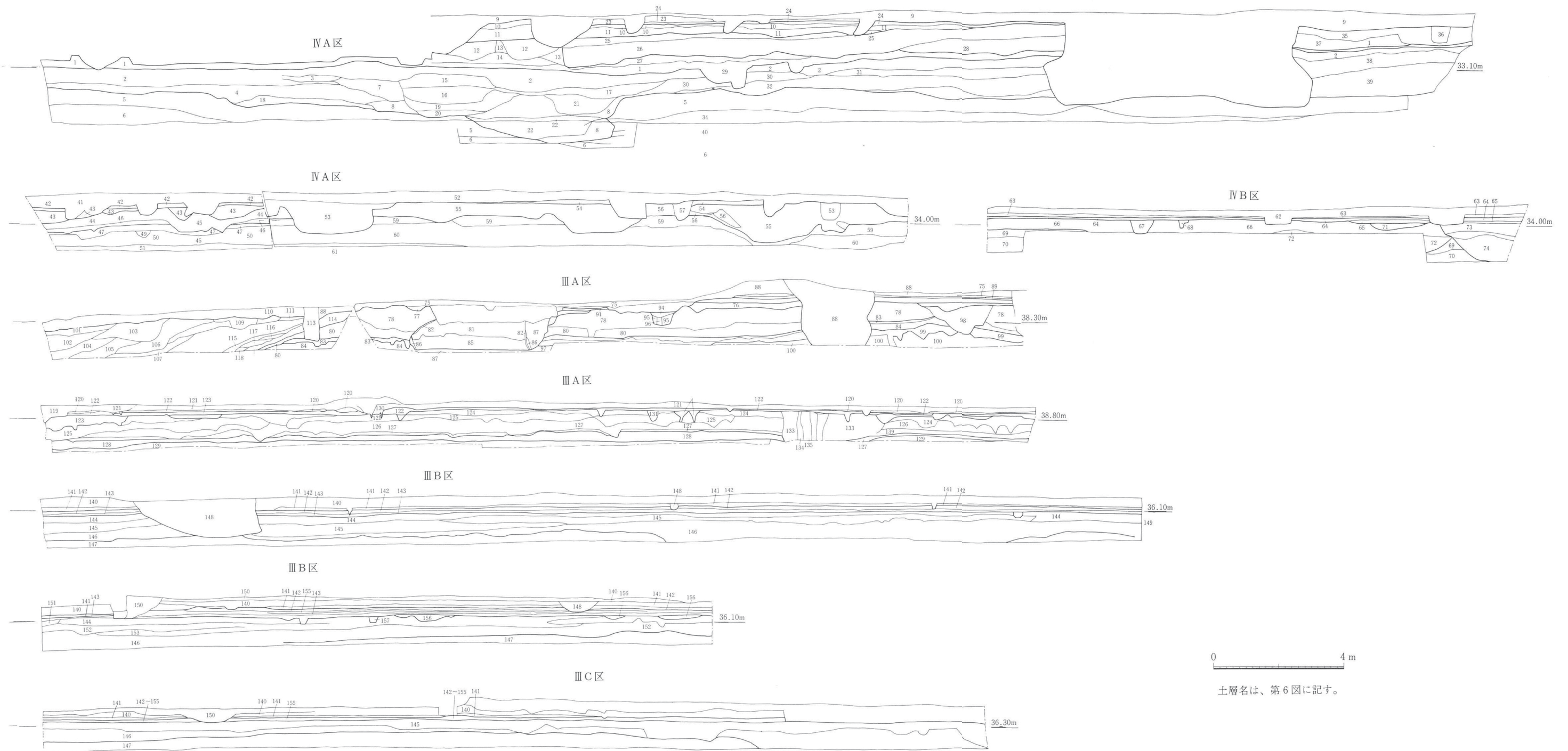
第I-1層 盛土や攪乱土で、厚さ50cmに及ぶ。

第I-2層 近、現代の水田耕土である。上層は現代の水田耕作土で暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)から成り、厚さは一様に約20cmを測る。IV A、IV C区には認められない。この下に、断続的に厚さ1～5cmの灰黄色微砂質シルト(2.5Y6/2)があり、旧耕土の可能性が高いが時期は不明である。下層は現床土でにぶい黄褐色粘質シルト(10YR5/4)を呈し厚さ2～4cmと薄い。

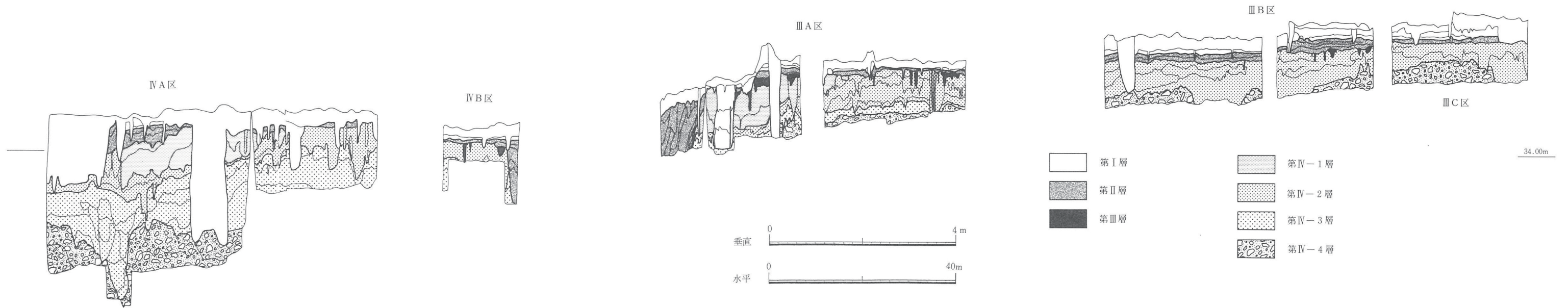
第II層 中～近世の堆積層である。IV D区西側を除いて概ね水平堆積をなし3層に細別できる。

第II-1層 暗灰黄色砂質シルト(10YR5/2)等である。黄褐色斑(2.5YR5/6)を多数含む他、マンガン細粒も若干見られる。厚さ5～20cmを測る。その直下には、床土様の厚さ約5cmのオリーブ褐色砂質シルト(2.5Y4/6)等が広がる。近、現代の耕土と同様の範囲に分布する。17世紀中葉に埋没したIV D区617-OSを覆うことから近世耕作土の可能性が高い。

第II-2層 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)等である。黄褐色斑(2.5Y5/4)を含むが第II-1層に比べて灰色味が強く、場所によっては粗砂を多く混入する。また、マンガン細粒を若干含む。厚さ5～10cmを測る。第II-1層より分布範囲が狭くIV B区ではこの層を欠く。古代、中世の遺物を数多く含む。条里地割に該当する13世紀前半のI C区244-OSを削平し、また、15世紀前中葉のI A区1-OSを覆うことから、中世後期の耕作土と考えられる。その直下には、厚さ1～3cmの床土様の黄褐色斑(10YR8/5)を多量に含むにぶい黄橙色シルト(10YR6/3)等がある。これらの下には、マンガン粗粒が厚さ1



第5図 北壁断面図 (1/120)



- | | | | | | | | |
|---|---|--|--|---|--|--|--|
| 1. 明黄褐色微砂質土(10YR6/6) | 19. におい黄褐色シルト質粗砂(10YR5/4) | 38. シルト質砂礫(10YR4/6)
径2~5cm | 60. 褐色粗砂(7.5YR4/6)
径10~20cmの円礫 | 82. 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) (竹材) | 103. におい黄褐色シルト質礫(10YR5/3)
径2~15cmの礫含む | 121. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/2)
(現代耕土) | 139. 褐色シルト質粗砂(10YR4/4)
径0.2~0.5cm |
| 2. 褐色砂質シルト(7.5YR4/3) | 20. 黄褐色粗砂(10YR5/8) | 39. 黄褐色礫質粗砂(10YR5/6)
径2~7cm互層 西側へ傾く | 61. 赤褐色粗砂(5YR4/6) | 83. におい黄褐色シルト(10YR6/4) | 104. におい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/4)
径2cmの礫含む(少し) | 122. 灰黄褐色砂質シルト(10YR6/2) (中世耕土)
暗褐色マンガンの大型斑多く含む(10YR3/4) | 140. 現代耕土
下層に2~3cmの床あり |
| 3. 褐色砂質シルト(7.5YR4/3)
径0.3cmの小礫含む | 21. 黄褐色砂(2.5Y5/4) | 40. 灰黄色シルト(7.5YR6/2) | 62. 盛土、腐植土 | 84. 褐色シルト(7.5YR4/4)
におい黄褐色シルト(10YR6/4) } ブロック土
径2~4cmの礫含む | 105. におい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/3)
径2cmの礫含む(少し) | 123. 灰黄褐色シルト質粗砂(10YR5/2)
径1~5cmの礫多く含む | 141. 旧耕土兼(床)
明赤褐色(2.5YR5/8)+灰白色シルト(10YR7/1)
明赤褐色(2.5YR5/8)+灰白色シルト(10YR7/1) (旧耕土) |
| 4. におい黄褐色シルト(10YR6/6寄り)
褐色砂質シルト(10YR4/6)ブロック土 | 22. におい黄色礫質粗砂(2.5Y6/3)
径0.5cm以下 | 41. 盛土 | 63. 暖灰黄色砂質土(2.5Y5/2) (耕土) | 85. 暗オリーブ灰色砂質シルトブロック土(2.5Y4/1) | 106. におい黄褐色礫質シルト(10YR5/3)
径3~6cmの礫含む | 124. におい黄褐色微砂質シルト(10YR5/4) (地山)
径2~3cmの礫少し含む | 142. 耕土
灰黄色シルト(2.5Y6/2) 灰黄色混砂土(2.5Y6/2) (耕土) |
| 5. におい黄褐色粗砂質礫(10YR5/4)
径1、3、15~20cm混在 | 23. 黄褐色微砂土(2.5Y5/3) (旧表土) | 42. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/4) | 64. におい黄褐色砂質土(10YR6/4) (耕土) | 86. 暗オリーブ灰色砂質シルトブロック土(5GY4/1) | 107. におい黄褐色礫質シルト(10YR6/4)
径7~15cmの礫含む | 125. 黄褐色微砂質シルト。バサバサしている(10YR5/6)
径0.5cmの小礫含む 124と125間は不明瞭 | 143. 灰黄褐色混砂土(M斑沈着層 部分的に褐色)
灰黄褐色土(10YR5/2) (マンガン斑沈着) |
| 6. 明褐色砂質礫(7.5YR5/6) 径5~10cm
水平に砂と互層になる。上半に酸化鉄層ができる | 24. 褐色粗砂質土(10YR4/6)
径1cmの礫含む | 43. 褐色粗砂質シルト(10YR4/6)
径1cm礫少し含む | 65. 64'黄色が強くなる | 87. におい黄褐色砂質シルトブロック土(10YR5/3) | 108. 黄褐色シルトブロック土(10YR5/6)
径2~6cmの礫少し含む | 126. 褐色シルト質小礫(10YR2/6)
径0.5~1cm | 144. オリーブ褐色粘土(2.5Y4/6)
マンガンの沈着が続く 汚れている土 |
| 7. におい黄褐色粗砂質シルトブロック土
径1cmの礫少し含む | 25. 黄褐色礫、粗砂質シルト
径1cmの礫含む 以下自然堆積 | 44. 褐色シルト質砂礫(10YR4/4)
径1~2cm 礫 | 66. 黄褐色混粗砂土(10YR5/6) | 88. 盛土 | 109. におい黄褐色シルト(10YR5/4) | 127. 黄褐色シルト(10YR5/8)
下半部は黄褐色シルトのブロック土(10YR5/6) | 145. 赤褐色(10YR5/8) (主に細礫、粗砂層) |
| 8. 灰黄色シルト(2.5YR6/2) | 26. 褐色砂質礫(10YR4/6)
径1~5cmの礫 混在ラミナなし | 45. ブロック土 | 67. 黒褐色土塊(2.5Y3/1)
明黄褐色土塊(2.5Y6/6) } ブロック土 | 89. 黄褐色シルト床土(10YR5/6) | 110. におい黄褐色シルト(10YR5/4)
径2~3cmの礫含む | 128. 褐色礫質シルト(10YR4/6)
径0.5~5cmの角礫含む | 146. 黄褐色粘土 |
| 9. 盛土 | 27. 黄褐色微砂質シルト(10YR5/6)
1より暗く砂分多い | 46. 黄褐色微砂質シルト(10YR5/6) | 68. 灰黄褐色土(10YR4/2) | 90. 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) } ブロック土
褐色砂質シルト(10YR5/6) | 111. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/4) | 129. 黄褐色シルト質礫より赤味(10YR5/8)
径5~10cm | 147. 洪積段丘礫層
10~20cmの円礫(+146層の粘土) |
| 10. 褐色砂質シルト(10YR4/4)
径1cmの礫少し含む | 28. 褐色シルト質粗砂~礫(10YR4/6)
径0.5~1cm 下部程粗 西へ傾く | 47. 褐色微砂質シルト
径0.5cm礫少し含む | 69. 褐色土(10YR4/6) | 91. 灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)
黄褐色砂質シルト斑含む(10YR5/8) (床土) | 112. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/4)
径2~3cmの礫少し含む | 130. 暗灰黄色砂質シルト(2.5Y5/3) | 148. 攪乱 |
| 11. 褐色砂質シルト(10YR4/6)
径2cmの礫少し含む。25層との境は小起伏 | 29. におい黄褐色シルト(10YR6/4) | 48. 46、47層ブロック土 | 70. 褐色粗砂(7.5YR4/4)
径2~5cm 礫 | 92. におい黄褐色シルト(10YR5/3) | 113. 黄褐色砂質シルトブロック土(2.5Y5/3) | 131. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/4) | 149. 土溜土 |
| 12. 黄褐色粗砂質シルト(10YR5/6)
径1~3cmの礫少し含む | 30. におい黄褐色シルトより明るい(10YR5/4)
黄褐色斑含む(10YR5/8) 径1~5cm 礫少し含む | 49. 褐色砂質シルト(10YR4/6) | 71. 褐灰色土(10YR4/1) | 93. 褐色砂質シルト(10YR4/4) | 114. におい黄褐色シルト(10YR5/4) | 132. におい黄褐色砂質シルト(古代包含層)
(10YR5/3)径2~3cm 礫少し含む | 150. 盛土 |
| 13. 黄褐色粗砂質シルト(10YR5/6)
12より礫少ない | 31. 褐色粗砂質シルト(7.5Y4/3) | 50. 褐色シルト質砂礫(10YR4/6)
径2~10cm 礫 | 72. 黄褐色粗砂(10YR5/6) | 94. 暗褐色粗砂質シルト(10YR3/4)
径2~3cmの礫少し含む | 115. 灰黄褐色シルト(10YR6/2)
褐色斑含む(10YR4/4) | 133. 褐色シルト軟い(10YR4/6) (風倒木)
径0.5~1cmの礫少し含む | 151. 中世の溝 |
| 14. 黄褐色粗砂質微砂土(10YR5/6)
1より粗砂多い | 32. 黄褐色砂(10YR5/8)
径1cmの礫少し含む 上半のみ | 51. 黄褐色礫質粗砂
径2~5cm 礫 | 73. 明黄褐色(10YR6/8) } ブロック土
におい黄褐色(10YR5/4) | 95. 褐色砂質シルト(10YR4/4) | 116. におい黄褐色礫質シルト(10YR5/4)
径2~3cmの礫含む | 134. 褐色砂質シルト(10YR4/6) (風倒木) | 152. 黄褐色細礫混り土(10YR5/8) |
| 15. におい黄褐色礫質シルト(10YR5/4)
径0.5~2cm | 33. におい黄褐色礫質粗砂(10YR5/4)
径2cm 礫含む | 52. 盛土及び攪乱土 | 74. 明黄褐色土・粗砂(10YR6/6)
径10cm 円礫 | 96. 暗褐色微砂質シルト(10YR3/4) | 117. 褐色礫質シルト(10YR4/6)
径3~4cmの礫含む | 135. 暗褐色シルト質粗砂(10YR3/4) (風倒木) | 153. 152層に比較して細い |
| 16. 暗灰黄色小礫
径0.5~2cm | 34. 灰黄色シルト質粗砂(2.5Y7/2)
径5cmの礫含む 上部から湧水 | 53. 攪乱 | 75. 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2) (現代耕土) | 97. 褐色シルト(10YR4/6) | 118. 灰黄褐色シルト(10YR6/2)
黄褐色斑含む | 136. 褐色シルト質礫(10YR4/4) (風倒木) | 154. 床
灰黄色混砂土(2.5Y6/2) |
| 17. におい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/4)
明黄褐色斑含む(10YR6/8) | 35. 黄褐色粗砂質シルト(10YR5/6)
径1cmの礫 | 54. 黄褐色土(10YR5/6) | 76. におい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/3)
褐色斑含む(10YR4/4) 径2~3cmの礫含む | 98. 褐色シルト質細砂(10YR4/6)
径3~4cmの礫少し含む | 119. 盛土 | 137. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/2) (ピット埋土) | 155. 床
明黄褐色粘土(2.5Y6/6) 黄褐色混砂土(床) (2.5Y5/4) |
| 18. におい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/4) | 36. 暗褐色粗砂質シルト(10YR3/4) | 55. 黄褐色土(10YR5/6)
径2~4cm均一の円礫(主体) | 77. 灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)
褐色斑含む(10YR4/6) | 99. 褐色礫質シルト(10YR4/6)
径3~4cmの礫含む | 120. 灰黄褐色砂質シルト(10YR6/2)
近世耕土、床土 | 138. 灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2) (中世耕土)
におい黄褐色斑含む(10YR5/4) | 156. 暗褐色土(一遺構) (10YR3/2) |
| | 37. 褐色砂礫(10YR4/4)
径1~5cmの礫 | 56. 黄褐色粗砂(10YR5/6) | 78. 褐色砂礫(10YR4/4)シルト混る
径2~3cmの礫含む | 100. 明褐色礫質砂(7.5YR5/6)
径6~7cmの礫含む | | | 157. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) |
| | | 57. 黒褐色土(7.5YR3/2) } ブロック土 | 79. 黄褐色砂質シルト、ブロック土(10YR5/6) | 101. におい黄褐色シルト質礫(10YR5/4)
径2~5cmの礫 | | | |
| | | 58. 明黄褐色土(10YR6/8) } ブロック土 | 80. 褐色砂(10YR4/4) | 102. におい黄褐色砂質シルト(10YR5/3) | | | |
| | | 59. 黄褐色粘土(10YR5/8) } ブロック土
暗褐色粘土(10YR3/4) | 81. におい黄褐色砂質シルト、ブロック土(10YR5/4) | | | | |

第6図 北壁断面模式図(水平1/800、垂直1/80)

cm程度に密に集積するが、後世の耕作等により二次的に形成されたものと考えられる。

第II-3層 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)等よりなる。I B、IV D区に於て、上記のマンガン斑集積層の直下に断続的に認められる。粗砂粒をほとんど含まず、第II-2層とは明瞭に区分できる。厚さ5~10cmを測り、地山である第IV層との界面は細かな起伏を持つ。13世紀代の条里溝に切られ、IV D区では古代の柱穴を覆っている。土質、色調等から耕土の可能性が高い。

第III層 平安時代の遺物包含層である。III A区のみに残存し、西側部分で厚さ5~15cmを測る。にぶい黄褐色粗砂質シルト(10YR5/3)等で、褐色斑(10YR4/4)を多量に含む。径2~3cmの礫を混入し、また、土器の小片をかなり含む。III A区西部の10世紀代の柱根痕埋土と共通するため、同様な時期を考えることができる。

第IV層 清見遺跡に於ける地山層である。無遺物の砂礫とシルトの互層で、4層に細別できる。

第IV-1層 地山最上部の砂礫層である。褐色(10YR4/4)等を呈す。礫径は2~3cmと比較的小さく、部分的に粗砂、シルトを介在させる。III A、I C区の西側、及びIV A区西半の2ヵ所に分布し、厚さ約1cmを測る。層の肩部はかなり傾斜を持つ。その他、I C区東半からI B区西半に於いても局地的に認められる。III A区ではこの層が10世紀代の遺構面となる。分布状況から旧河道の埋土と考えられ、IV A区の河川状遺構がその一つに該当する。

第IV-2層 上半部は黄褐色微砂質シルト(2.5Y5/4)で、厚さ5~20cmを測る。第IV-1層で切られる以外は全域に分布し遺構面を形成する。下半部は第IV-3層との間に、厚さ約30cmの黄灰色シルト質砂礫(2.5Y5/1)層が幅広くレンズ状に挟まる。

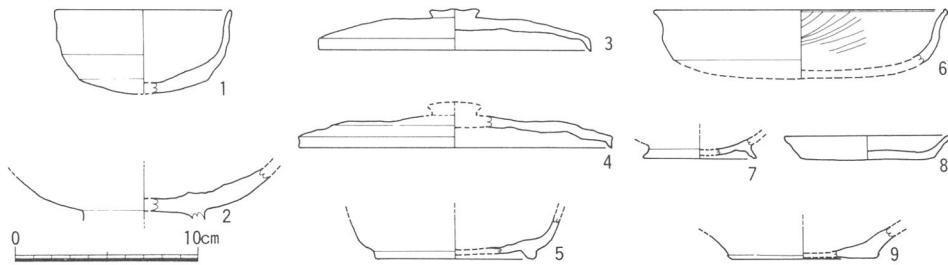
第IV-3層 最上部には厚さ15~30cmの褐色シルト(10YR4/4)があり、調査区全域に広がる。この上面には乾燥状態を示す縦方向の細かい亀裂が入る。下半部は明黄褐色シルト(10YR6/6)で、西側に傾斜する。IV D区西側では厚さ1.5mを測り、この部分には第IV-4層を切り込む旧河道が認められる。

第IV-4層 段丘礫層である。にぶい黄褐色粗砂質礫(10YR5/4)等で、礫径は15~30cmが主体となる。礫面はほぼ水平方向に揃い、薄くシルト層を挟み極めて堅く締まる。地下水の影響で一部赤褐色に酸化する。上面の標高はIV D区T.P.33.5m、I A区T.P.36.3mを測り、現地表に対応してIV区とそれ以东で段差を持つ。上面には谷状の落ちが数ヵ所認められる。

第Ⅲ層出土遺物 (第7図 図版29・32)

(1～5、9、127)は須恵器である。(1)は杯身で底面は丸みを持ち回転ヘラ切り痕を残す。(2)は高台付壺の底部で内面に同心円状の叩き目を残す。(3、4)は杯蓋で、(3)は偏平で中央が突出する擬宝珠様つまみを付け、(4)は端面がZ字形に屈曲し天井部にやや雑な回転ヘラケズリを施す。(5)は杯身で底部端に近く直立気味の高台を付ける。(9)は鉢の底部でヘラ切り痕を残す。(6、8、126)は土師器である。(6)は杯身で体部はS字状に屈曲し口縁端部を内側へ折り返す。内面は粗い放射状暗紋を巡らす。体部内外面はヨコナデ、底面はヘラ削りする。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈し白色微砂粒を含む。(8)は皿で口縁部を欠くが底部内外面に指押え痕を残し、体部を強くヨコナデする雑な作りである。淡黄色(2.5Y8/3)を呈し径1mm以下の白色砂粒、赤色酸化粒を含む。(7、128)は黒色土器B類塚で八字状に開く高い高台を付し内面をヘラ磨きする。

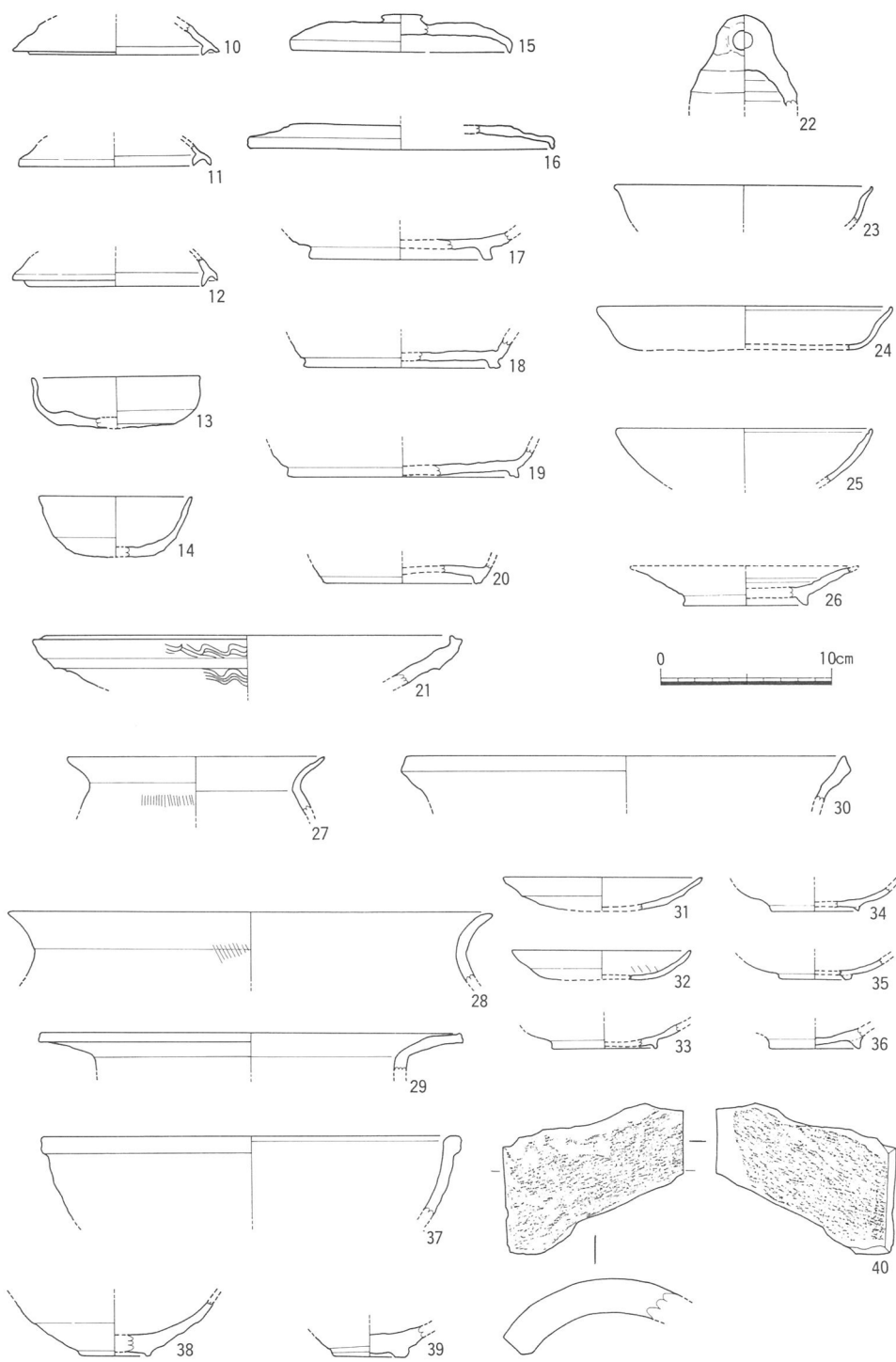
遺物の時期は(1)は陶邑編年Ⅲ型式1段階で7世紀代、(3)は同Ⅳ型式2段階、(4、5)は同Ⅳ型式3段階、(6)は平城宮Ⅲ～Ⅳ式で8世紀代に該当する^(註1)。下限は、(7)は10世紀代、(8)はやや下がる可能性があるが、第Ⅲ層には瓦器片を全く含まないことから11世紀以前であろう。



第7図 第Ⅲ層出土土器 (1/4)

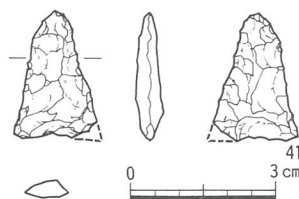
第Ⅱ層出土遺物 (第8・9図 図版29～32)

出土地区は、ⅠA区(38)ⅠB区(17、20、26、30～32、39、40、117、118)ⅠC区(23、27、33)ⅢA区(16、36)ⅢB区(25、34、119)ⅢC区(18)ⅣA区(122、123、125)ⅣB区(13～15、19、24、121、124)ⅣD区(10～12、21、22、28、29)である。(10～22、30、122～125)は須恵器である。(10～12、15、16)は杯蓋である。(10、11)は復原口径約10cmと小形でかえりは口縁端部より僅かに下に出る。(15、16)は端面を下方に屈曲させる形態で、(16)は天井部が平坦で端がZ字状に屈曲する。(13、14、17～



第 8 图 第 II 层出土土器 (1/4)

20、124) は杯身である。(13、14) は底面に回転ヘラ切り痕を残す。(17) は底部端よりやや内側にハ字状の高台を付し、底面は回転ヘラ削りを施す。(18、19) は底部端近くに外接する高台を付し、(18) は底面に回転ヘラ切り痕を残す。(20) は底部端に直立する低い高台を付す。(21) は甕で端面が断面三角形に肥厚し、外面に低い凸帯と波状紋(4条/1.7cm)を巡らす。(22、123) は釣鐘形の飯蛸壺である。(125) は堤瓶の体部で外面をカキ目調整し、内面は同心円状叩き目を回転ナデで擦り消す。(122) は丸底の壺であろう。(23~24、27~29、121) は土師器である。(23) は杯身、皿で体部がS字状に屈曲し端面は内側へ折り返される。摩滅が著しく調整不明である。(23) は明赤褐色(5 YR5/8)、(24) は浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈し、胎土に径1mmの白、黒色砂粒を含む。(27、28) は甕でく字状に外反する口縁を持つ。(27、28) は体部外面をやや左上がりハケ調整口縁部をヨコナデする。(29) は口縁内面を横ハケ調整する。(27) は橙色(5 YR5/6)、(28) は浅黄橙色(7.5YR8/3)、(29) は橙色(5 YR6/8)を呈し、胎土に径0.5~1mmの白色砂粒、赤色酸化粒を含む。(25) は黒色土器B類碗で口縁部直下に浅い沈線を巡らす。内面は密にヘラ磨きし外面はヘラ削りの後ナデ、下半部には指押え痕を見る。浅黄橙色(10YR8/3)を呈し径2mmの白色砂粒を含む。(26) は緑釉の皿で内面に段を持ち、高台は断面三角形で外縁が接地する。須恵質で灰白色(N4/0)の精良な胎土をもつ。(30) は須恵質練鉢で、口縁が肥厚し内傾する面が灰色(N6/0)を呈す。(31~36、119) は瓦器である。(31、32) は皿で、内面の暗紋は摩滅で不明である。(33~36) は碗底部で低い断面三角ないし逆台形の高台を付す。(37、38、117) は陶器である。(37) は鉢で口縁上端が断面方形に肥厚する。体部外面に白泥で緩やかな波状紋を描く。断面は赤色(8.5Y8/2)、釉は内外面に塗布され灰白色(8.5Y8/2)を呈す。(117) も同様の胎土と釉をもち内外面に白泥で波状紋を描く。(37~39) は低い削り出し高台を付ける。(38) は断面橙色(5 YR6/6)で体部下半を除いてオリーブ色(5 Y5/6)の釉を厚く塗布する。(39) は断面暗赤色(10YR3/6)のやや粗放な胎土に、内面にオリーブ灰色(10



Y5/2)の釉を塗布し見込みの4ヶ所にトチ跡がある。(40) は瓦質の軒丸瓦で内面に布目圧痕、外面に離れ砂が残る。他に韃の羽口がある。1つは厚さ2.5cmで端面は平坦で、外面は融解する。内面は橙色(5 YR7/6)で軟質、径6mmの白色粒を含む。いま1つは先端が細く、若干加熱を受ける。にぶ

第9図 第II層出土石器(1/2) い橙色(7.5YR7/4)を呈し径0.5mmの白、褐色砂粒を含む。

若干の鉄滓がある。

(41) は凹基無茎式の石鏃で、基部を欠くが現存長26.3mm、現存幅17.2mm、厚さ5.1mm、重さ1.89gを測る。剝離は粗雑で、表面がかなり風化する。サヌカイト製である。

時期の判明する遺物は、古墳時代後期から近世まで幅を持つ。6世紀代は(21、122、125)が挙げられる。7世紀代は(10～14)の須恵器がある。この時期の遺物はⅣB、ⅣD区に限られる。8世紀代は(15～20、23、24)が挙げられる。9、10世紀代は(25、26)が該当し、(26)の緑釉は高台の形態から滋賀県産と推定される。中世では(31～36)の瓦器が13世紀代の特徴を備え、(30)も13～14世紀初頭の東播磨産である。この他にもⅠA、ⅠB区で15世紀代の瓦質羽釜片が出土している。近世では(37、117)の唐津焼が該当する。第Ⅱ層に各時期の遺物を見るのは、先行する遺構面を大幅に削平して形成された結果と考えられる。

第2節 小調査区の概要 (付図1、2、3)

ⅠA区(図版2)遺構面はT.P.36.7mを測る。主要遺構は、中世後期の条里地割りに伴う坪界溝(1-OS)、近世期の小溝群であり、他に時期不明の柱穴が散在する。この内、1-OSは層位関係より基本層序第Ⅱ-2層の上限を決める資料になっている。

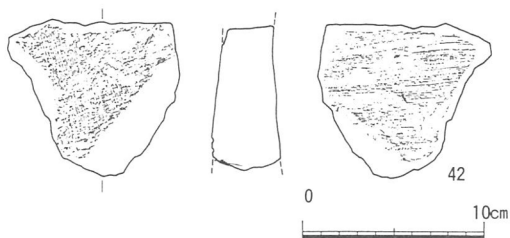
ⅠB区(図版3)この調査区は厚い盛り土に覆われている。遺構面はT.P.36.3～36.2mを測る。数カ所に大きな攪乱坑があったが、第Ⅱ層は良好に残存する。主要な遺構は、中世期の条里地割りに伴う坪境の溝と坪の中を区画する小溝群である。また、性格不明の中世期の土坑があった。散在するピット群は建物にはならず、杭跡などの可能性が高い。

ⅠC区(図版5)攪乱坑により遺構の遺存状況が不良である。遺構面はT.P.36.2～35.7mを測り、ⅠB区より西方に傾斜している。主要遺構には、古代の掘立柱建物2棟、土坑2基、掘立柱列、中世前期の区画溝4条があり、他に近世期の小溝や時期不明の柱穴が散在する。上記の内、244-OSなどの中世前期の区画溝は当地における大規模土地開発の初源を知り得る資料である。

ⅡA区(図版9)Ⅱ区は現道の下にあたるために、すでに包含層は失われており、遺構も非常に浅いことから遺構面をも削平されている地区である。遺構はほぼ中央付近から南西方向にかけて約60を検出した。各遺構の内訳は掘立柱建物が5棟、土坑1基、溝1条、その他はピットである。遺構の時期は遺物が少ないため正確には把握できないが、奈良時代から平安時代前期と考えられる。

II B-1～3区(図版9) II区は現道の下にあたるために、すでに包含層は失われており、遺構も非常に浅いことから遺構面をも削平されている地区である。しかし、ほぼ全域にわたって約70を検出した。各遺構の内訳は掘立柱建物が1棟、土坑2基、溝1条、その他はピットである。遺構の時期は遺物が少ないため正確には把握できないが、奈良時代から平安時代と考えられる。

III A区(第10図 図版13) 遺構面は東端でT.P.35.5m、西端でT.P.34.9mを測り中央部付近で急に落ちる。遺構は東西に別れ、東側では古代の建物1棟と溝、時期不明の柱穴群、西側では平安時代の建物1棟と同時期の柱穴群、土坑などが



第10図 375-00出土瓦(1/4)

あった。西端の近世の落込みはIV B区と同様な大溝になる可能性がある。また、近代の水溜(375-00)から奈良時代の軒丸瓦(42)と、近代の磁器片が出土する。

III B区(図版17) 遺構面はT.P.36.2m前後を測る。主要遺構には、中世前期の区画溝など溝6条、土坑1基、柱穴群などがある。柱穴群は調査区の西端付近で途ざれる。

III C区(図版18) 遺構面はT.P.36.4m前後を測り、I区同様に西へ傾斜している。調査区の東半は攪乱坑により遺構面の大半が消失している。主要遺構にIII B区から伸びる中世期の柱穴群がある。

IV A区(図版19) この調査区は工場跡地のため随所に大きな攪乱坑があり、遺構面に相当する面も相当荒されていた。やや残りの良い東端部は、T.P.34.2mを測り、中世期の柱列があった。西半部は特に攪乱が著しいため遺物の確認をかねて地山最上部の第IV-1層(砂礫層)を掘り下げた。その結果、遺物は出土しなかったが第IV-2層上面にて自然流路と砂礫の詰まった土坑状の落込みを多数検出した。そして第IV-1層自体がIV A区中央付近を肩にする大きな旧河道の埋土であることが判明した。この層はIV C区にはほとんど無く河道は南西から北東に流れ、幅30m以上、深さ1.3m以上と考えられる。肩部はT.P.34.5m、底面はT.P.33.1mを測る。調査区のすぐ西側の清児から麻生中へ流れる小川はその後身になるかも知れない。上記の土坑の1つ527-00は、楕円形で長さ2.5m、幅1.7m、深さ0.4mを測り、黄褐色シルト質礫(10YR5/6)を埋土とする。風倒木の可能性がある。なお包含層からは6世紀代の遺物を見る。

IV B区(図版20) 遺構面はT.P.34.1mを測る。調査区が狭いにもかかわらず、古代の掘

立柱建物4棟、土坑2基、近世期の溝1条、井戸1基、土坑2基が検出されている。他に、近・現代の土坑や井戸（600・615-OW）がある。上記の内、近世期617-OSは層位関係より基本層序第II-1層の上限を決定する遺構になる。

IVC区 攪乱が著しく、遺物包含層は完全に消失し、遺構面もかなりの削平を受けている。遺構、遺物は皆無である。

IVD区（図版25）遺構面は現代の水路で南北に分断される。南側はT.P.34.9m、北側はT.P.34.5mを測る。狭い調査区であるが、当遺跡で唯一の飛鳥時代に遡る落込み状土坑が確認された。他には古代の建物1棟、若干の柱穴群、ほぼ南北に延びる中近世の小溝群がある。

第3節 飛鳥時代

〈概況〉 IVD区に於て不定形の土坑が1基検出されている。

土坑

637-OO（第11・12・13図 図版26・29・30・37）

IVD区南側に位置する。平面が不定形を呈する落込み状の土坑である。北端は現代の水路に切られ、南側は調査区外へ続く。北側で幅が広がると共に深くなる。現状で東西4.4m、南北4.9m、深さ0.28mを測る。断面は浅いU字形を呈す。底面には凹凸が認められ、特に西側が東西1.5m幅で溝状にくぼみ、その東には楕円形の浅い落込みがある。埋土は2層に別けることができるが、その差は僅かである。上層はにぶい黄褐色シルト（10YR5/3）、下層は灰黄褐色シルト（10YR5/2）で暗褐色斑（10YR3/3）を含む。遺物は両方に含まれるがやや下層に多く、ほとんどが小片である。遺構の性格は不明である。なお、638-OP、640-OPは、この遺構が埋まった後作られる。

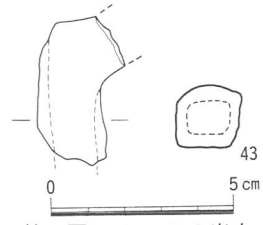
出土遺物は土師器106片、須恵器52片、鉄器1片を数える。（44～56、58、167）は須恵器である。（44～47、167）は杯蓋である。（44、45）は内面にかえりが付く形態である。かえりは口縁端部とほぼ同じ長さに延びる。（167）は口縁端よりやや内側に形骸化したかえりを持つ。焼成不良である。（46、47）は、かえりの無い形態である。（48、49）は杯身で、立ち上がりの上端は口縁部より上方に出る。（48）は底面を回転ヘラ削りする。復原口径9～11cmを測る。（53）は平底で、他は若干丸みを持つ。（51～53）は外面を回転ヘラ削りし、（49）は回転ヘラ切り痕を残す。（54～56）は飯蛸壺で、肩のあまり張らない釣鐘形を呈す。（55、56）は体部に回転ナデによる稜線が明瞭である。（55）はやや

焼成不良である。(58)は壺口縁で端面を上下に拡張する。

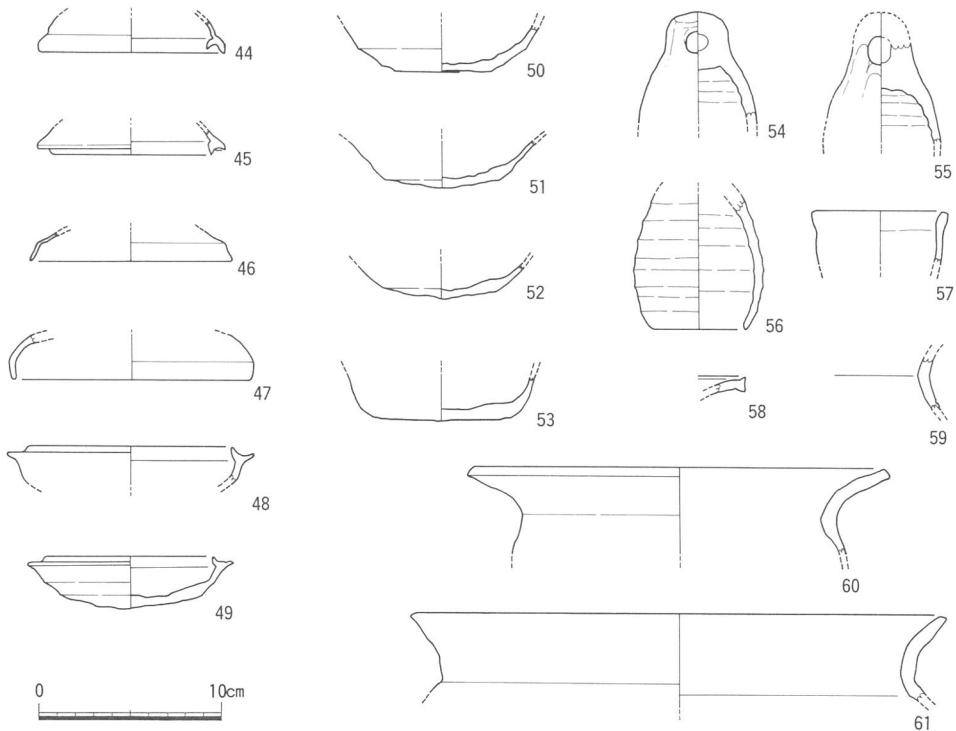
(57、59~61、168、169)は土師器である。(56)は小形の鉢で、口縁内面が帯状に肥厚する。灰白色(5 Y8/2)を呈し精良な胎土をもつ。(59)は甕と考えられる小片で、

体部外面にやや右上がりのヘラ描き沈線を1条施す。外面は縦に刷毛調整し、内面は横にヘラ削りする。赤色(10YR5/6)で胎土には径1mm以下の白色砂粒を多く含む。(60、61)は甕である。頸部は緩やかにくの字形を描いて外反し端面は平坦になり内傾する。摩滅のため調整は不明である。(60)は橙色(5 YR6/8)、(61)は灰色(5 Y5/1)を呈し両者共に径2~4mmの白色砂粒を若干含む。焼成は軟質である。

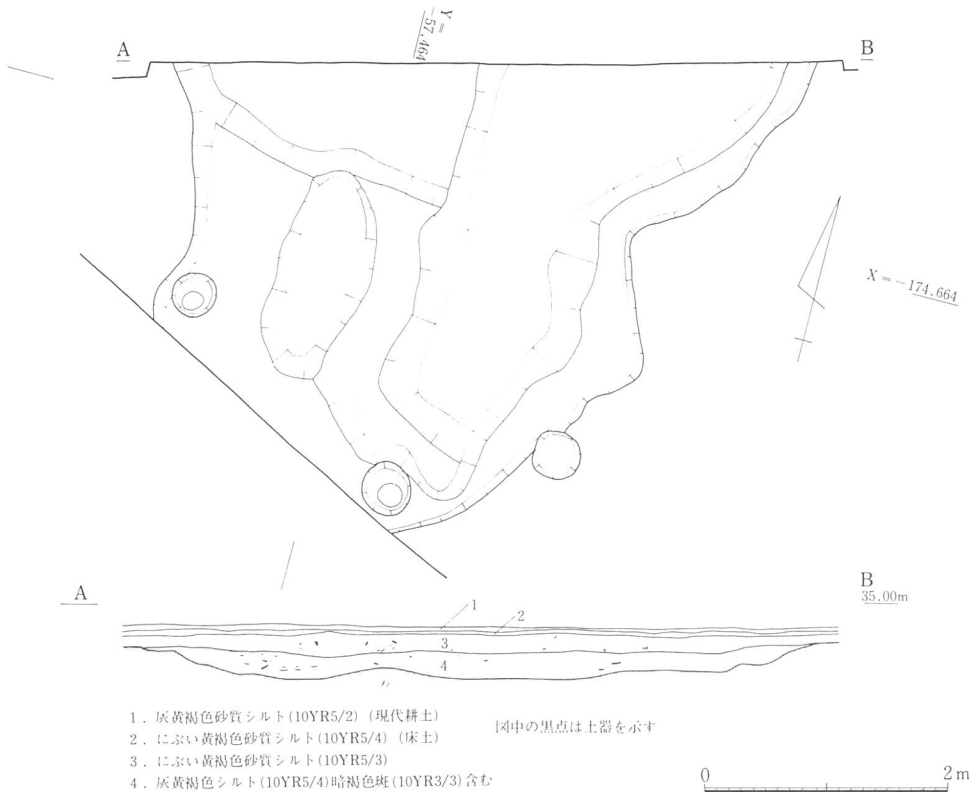
(168、169)は同一個体と推定される甕の小片であろう。(169)は厚さ0.8cmを測り、内外面に粗い刷毛目を施す。(168)は厚さ1.5cmのやや内湾する破片で、内面に粗い刷毛目、外面には指押え痕を残す。両者共にぶい橙色(7.5YR5/4)を呈す。鉄器(43)は錆が著しく両端を欠損するが、一辺1.3cm、現存長4cmを測る。断面方形を呈し、先端がL字形に曲がり、釘の可能性が高い。



第11図 637-〇〇出土鉄器(1/2)



第12図 637-〇〇出土土器(1/4)



第13図 637-00平面・断面図 (1/60)

遺物の時期は、(46~49)は陶邑編年II型式6段階に、(44, 45)は同III型式1段階に該当し、7世紀前~中葉の年代が与えられる。(48~52)も同様であろう。(167)は同第III型式第2-3段階の可能性が高く、7世紀後葉に下がる。しかし、より明らかに時期の下がる遺物を全く見ないため、遺構の時期を7世紀代に置くことができる。なお当該調査区の第II層出土の遺物中にはこの遺構からの遊離品を含むと考えられる。

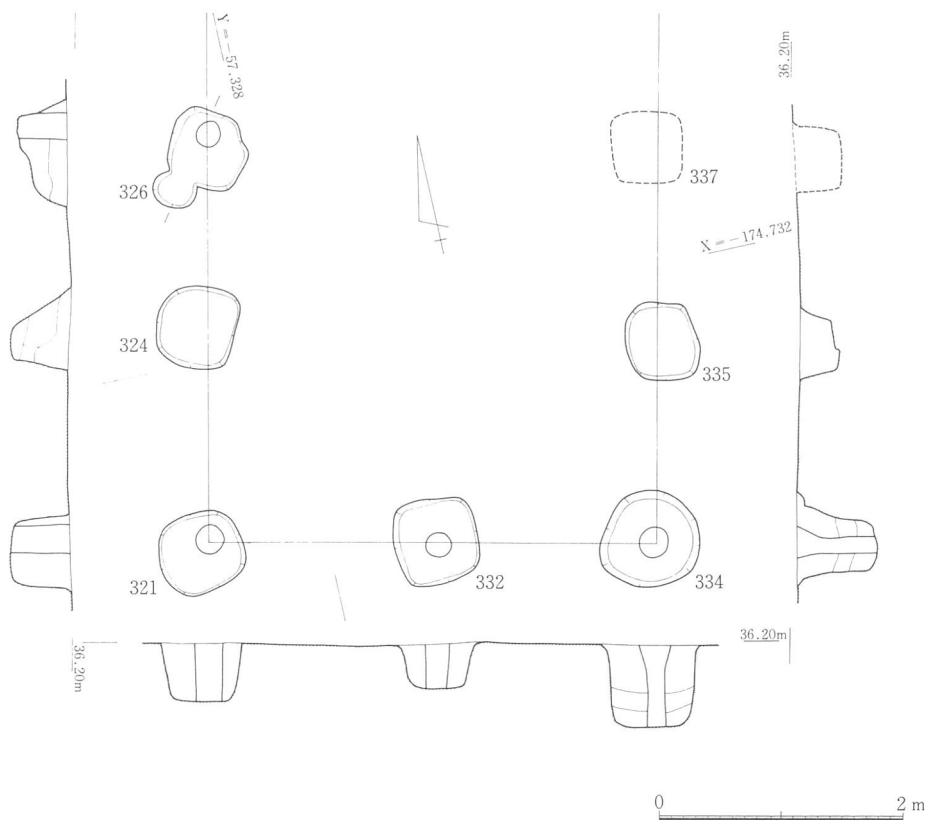
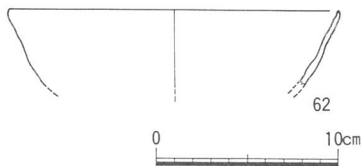
第4節 奈良時代~平安時代

〈概況〉 II B区からIV B区に分布し、種類別には、掘立柱建物15棟、柱穴群3箇所、土坑9基、溝1条、掘立柱列1列がある。遺物包含層の大半は消失しているが、III A区にはかろうじて平安時代の包含層(基本層序第III層)が残存している。出土遺物より時期の確定できる遺構は少なく、上記の内には埋土の共通性や遺構の重複関係により当該期に含めたものもある。傾向として奈良時代に属する遺構は少なく、大半は平安時代と推定される。

掘立柱建物

1001-OB (第14・15図 図版5)

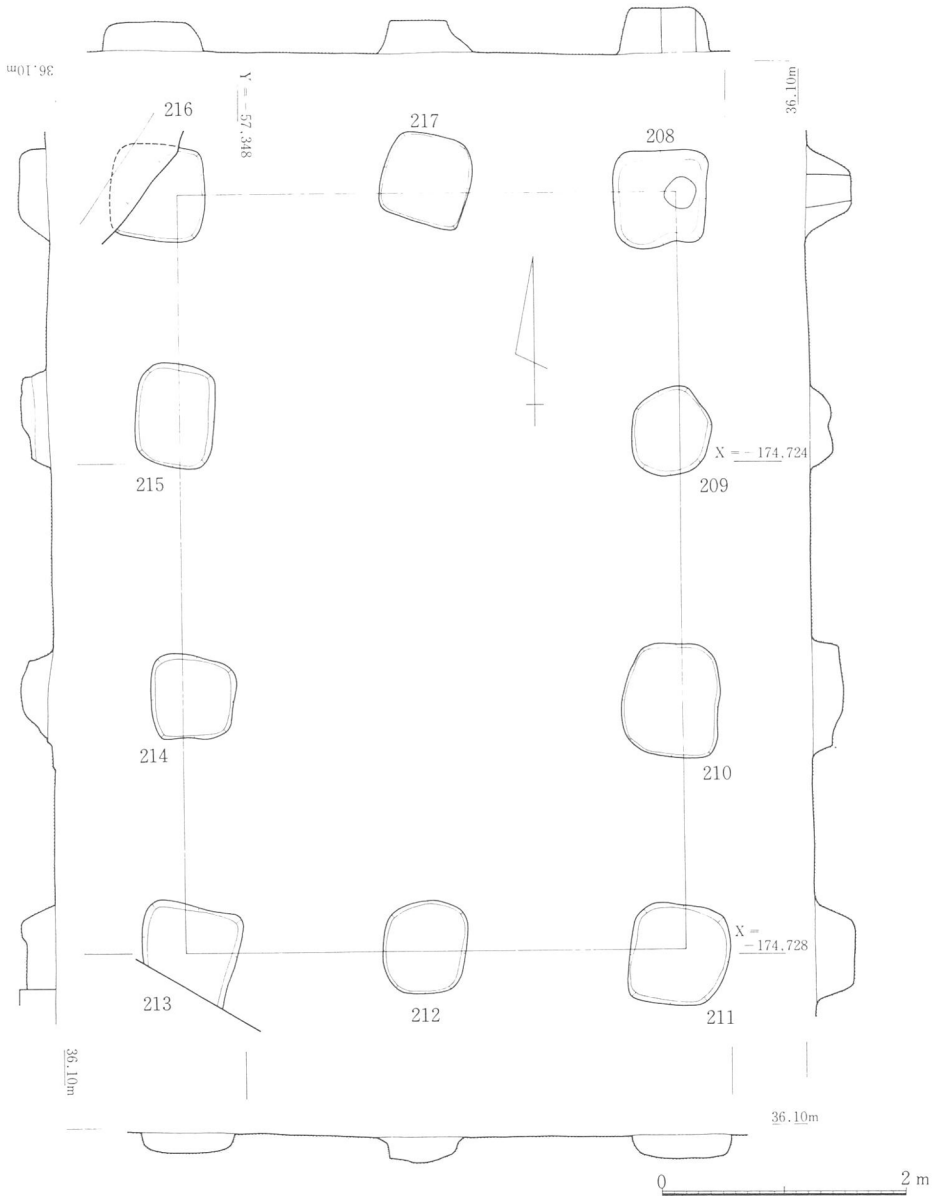
I C区東端で検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、棟方向は真北より東へ13度振れている。北への続きはII B区で検出されるとの予測があったが、その範囲が埋管設置による攪乱を受けており結果的には未検出に終わり全容を知ることはできなかった。桁行全長は3.30m以上で柱間寸法は1.65m等間を、梁行全長は3.64mで柱間寸法は1.82m等間を計測する。柱掘形は一辺60~80cmを測る隅丸方形で、深さは30~70cmを測る。柱根跡は326・321・332・334-OPで観察され、その径は25cm前後を計測する。遺物は柱掘形埋土より須恵器・土師器破片が検出されている。器形の判明するのは須恵器埴 第14図 1001-OB出土土器(1/4)(62)のみである。径18cmを測り、10世紀代の資料と推定される。



第15図 1001-OB平面・断面図 (1/60)

1002-OB (第16・17図 図版6・33)

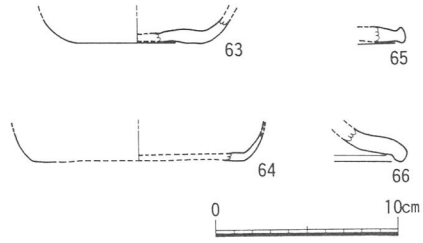
I C区1001-OBの西約15mにて検出した。桁行3間(6.2m)、梁行2間(4m)の南北棟掘立柱建物である。柱根跡は北妻柱列の北東隅柱(208-OP)にしか確認されていないが、柱間寸法は桁行・梁行とも概略数値で2mと算出される。柱掘形は隅丸方形で、一



第16図 1002-OB平面・断面図(1/60)

辺80cm前後、深さ30～40cmを測る。208-OPの柱根跡は径25cmを計測する。

遺物は各柱掘形埋土より、須恵器杯、土師器杯・皿・甕などの破片が検出されているが、図化資料は下記の4点である。須恵器杯(63)は217-OP出土。同杯(64)は213-OP出土。土師器高杯口縁端部(65)と脚端部(66)は208-OP出土。上



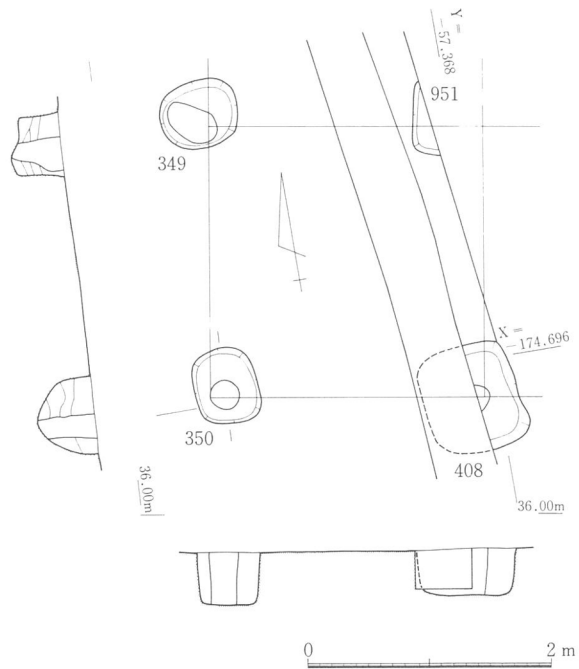
第17図 1002-O B出土土器(1/4)

記の内、時期比定の可能な資料は高杯脚端部(66)で、端部が内方に丸く肥厚することから平城京S E 650 B～平安京左兵衛府S D 1に比定しうる。

この資料は掘形埋土内出土ではあるが、これをもって本建物の時期を先の遺物により9世紀後半～10世紀中頃とみて大過ないと考えられる。

1003-OB (第18図 図版14)

III A区の東端に位置する。北西隅柱を含む4個の柱穴を検出した。大半は調査範囲の東側に続く。間取り1間以上の建物に復原した場合、その中軸線上にも柱穴(408-OP)が位置するため、総柱建物ないし庇付建物の可能性が高い。南北の柱筋は真北より東へ9度傾く。柱間寸法は2.1～2.2mを測る。柱根跡は径0.25m、掘形は隅円方形で1辺が0.5～0.8m、深さ0.45～0.55mを測る。408-OPの掘形はやや大形である。349-OPは柱根抜き穴を持つ。埋土は、柱根跡が褐色砂質シルト、掘形はにぶい黄褐色砂質シルトで3層に分かれる。



第18図 1003-O B平面・断面図(1/60)

遺物は、349-OP、350-OPから出土し、土師器11片、須恵器1片を数える。いずれも細片のためその時期を明らかにしない。遺構については、掘形の形態、柱筋方向から古代

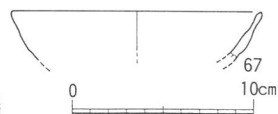
に遡るものと考えられる。

1004-OB (第19・20図 図版16・34)

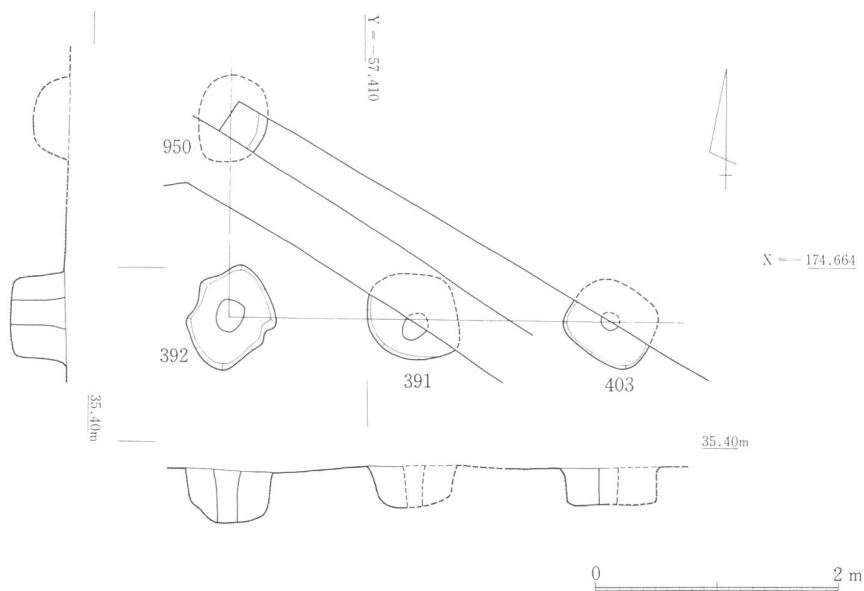
III A区の西側に位置する。南西隅柱を含む3個の柱穴を検出した。大半が調査区の北側へ続くため、棟方向は不明である。南北柱筋方向は、真北より1度西へ振る。柱間寸法は、1.5~1.6mを測る。柱根跡は径0.15~0.25m、掘形は隅円方形を呈し一辺約0.65~0.7m、深さ0.45~0.9mを測る。埋土は、柱根跡が褐色砂質シルト、掘形は上層が黄褐色、下層は褐色砂質シルトである。

出土遺物は、土師器13片、須恵器8片、黒色土器1片を数える。

(67)は392-OPから出土した須恵器の埵口縁部である。口縁端面は丸く、下をヨコナデによりややくぼませる。復原口径13.8cmをはかる。黒色土器は392-OP上部から出土しB類の細片である。いずれも細かい時期は明かでないが、前者は篠窯産と推定される。従って遺構は10世紀代である可能性が高い。



第19図 1004-OB
出土土器 (1/4)



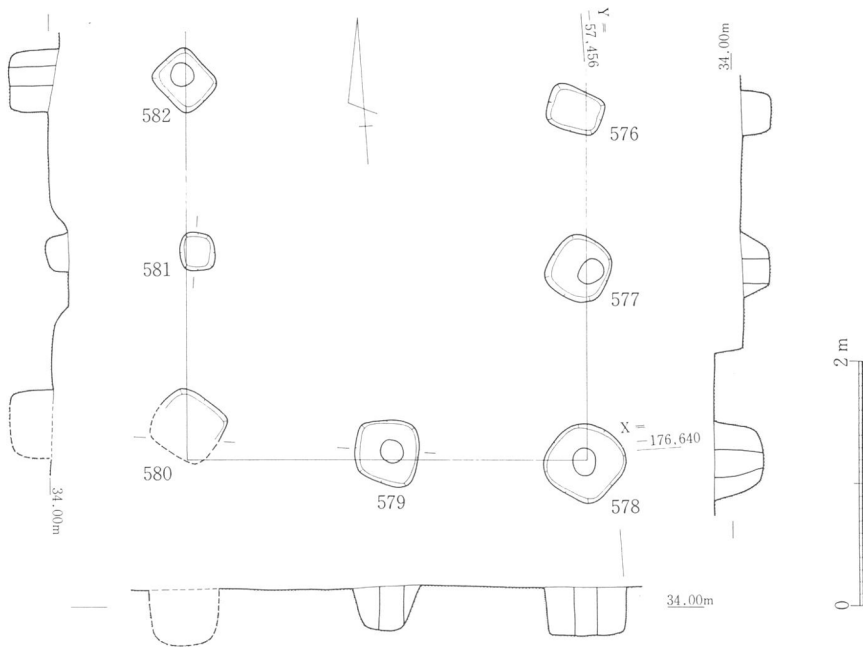
第20図 1004-OB平面・断面図 (1/60)

1005-OB (第21図 図版21)

IV B区東半で検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、棟方向は真北より東へ4度振れている。建物の南への続きは617-OSに切られて不明である。梁行全長は柱根跡の残る西1間(1.58m)をもって復元すると3.16mになる。桁行の柱間寸法は柱根跡の

残る東柱列北1間で1.56mを実測し、概略数値では梁間のそれと等しい数値を示す。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一辺30~60cm、深さ20~40cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕はみられず、柱根跡の観察される場合が多い(577・578・579・582-OP)。柱根跡径は概ね20cmを計測する。

遺物は未検出で直接的な時期の比定は困難だが、棟方向の一致から西約5mに位置する1008-OBと同時期と推定される。東隣りに位置する1006-OBとは、本建物の北妻北西隅柱が約40cmと接近していることから同時併存の可能性は低い。



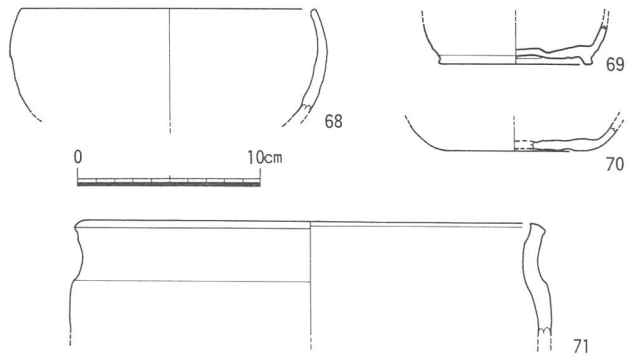
第21図 1005-OB平面・断面図(1/60)

1006-OB (第22・23図 図版21・35)

IVB区東半で検出した。桁行2間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物である。北への続きは調査区外にあたり全容は不明である。柱の抜き取りが著しく柱間寸法は計測不可能であるが、柱掘形の配置関係より2m前後と推定される。従って、桁行全長4m以上、梁行全長4mと推定される。柱の抜き取り痕跡は、570・572・573-OPにみられる。571・574-OPには柱根跡が観察され、これに拠ると柱掘形は一辺20~60cmの隅丸長方形で深さ10~30cmを測り、柱根跡径は15cm前後を計測する。

遺物は柱抜き取り穴埋土より須恵器・土師器の破片が検出されている。須恵器鉢(68)

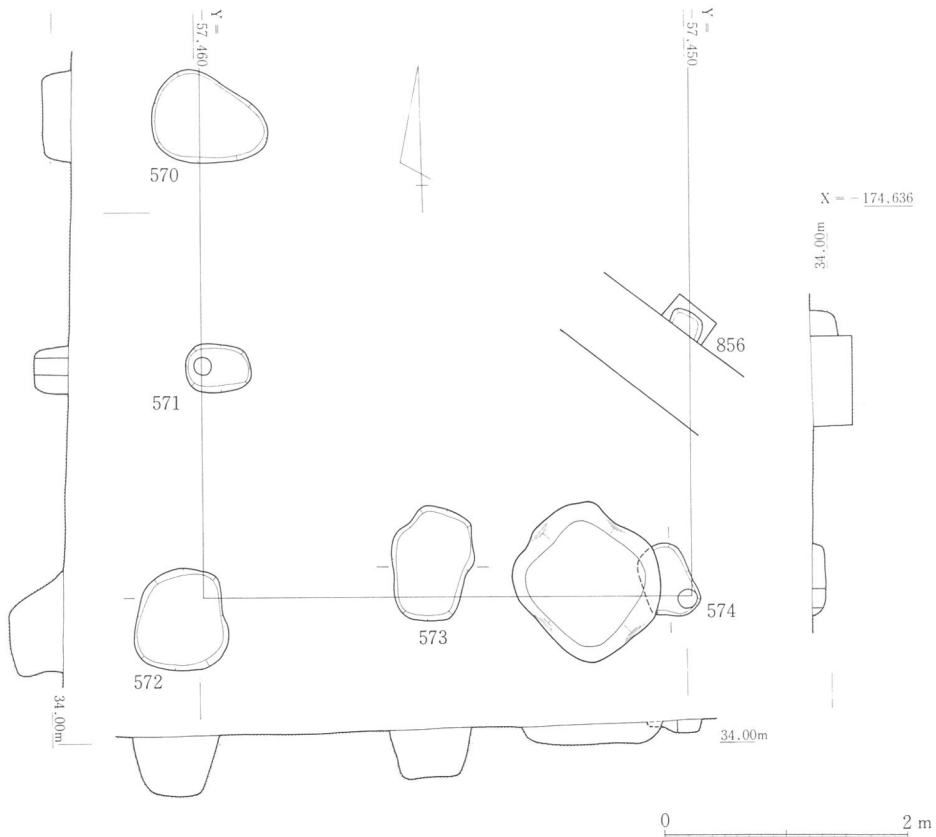
は572-OP出土で、鉄鉢形を呈し口径16cmを測る。須恵器杯(70)は573-OP出土で、へら切未調整の底部である。須恵器杯(69)も同じく573-OPで、底端部にハの字形に開く高台が付く。須恵器鉢(71)も同じく573-OP出土で、口径24cmを測る大形品で



第22図 1006-OB出土土器(1/4)

肩部には張りがなく口縁部が直立気味に外反する。

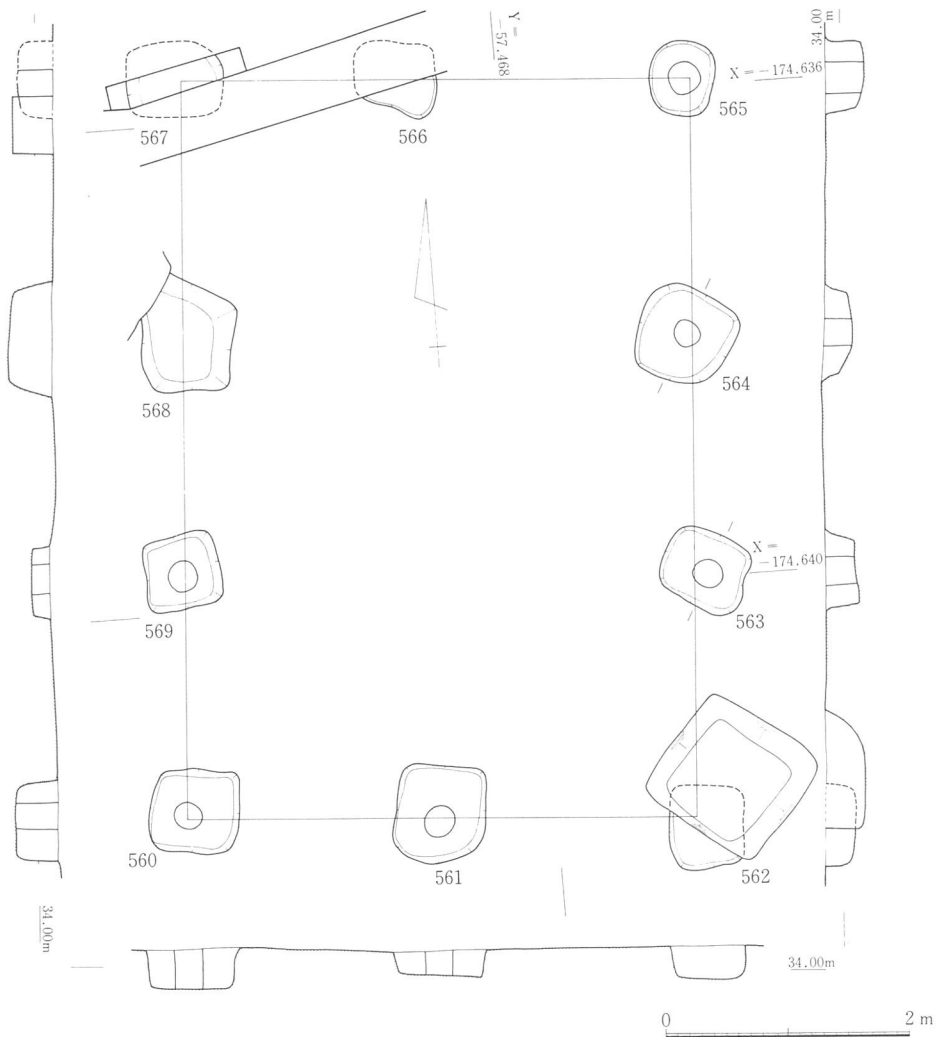
上記の柱抜き取り穴埋土出土の土器は9世紀前半~中頃に収まり、これをもって建物の時期とすることができよう。



第23図 1006-OB平面・断面図(1/60)

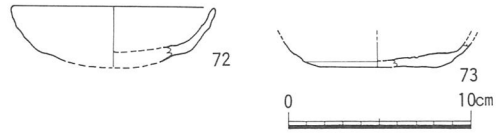
1007-OB (第24・25図 図版22・35)

IV B区の西半で検出した。桁行3間、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ4度振れている。梁行全長は柱根跡の残る南妻柱列西1間(2.05m)を基準にすると4.10mになる。桁行全長は西柱列の柱間寸法を概略数値で2m等間と見做すと約6mと算出される。柱掘形は、一辺55~80cm、深さ15~30cmを測る。柱根跡は560・561・563・564・565・569-OPにみられ、その径は20cm前後を計測する。568-OPは形状からして柱抜き取り痕と推定される。



第24図 1007-OB平面・断面図 (1/60)

遺物は各柱穴掘形より須恵器・土師器の細片が検出されているが、時期の知り得る資料は下記の須恵器杯の2点である。



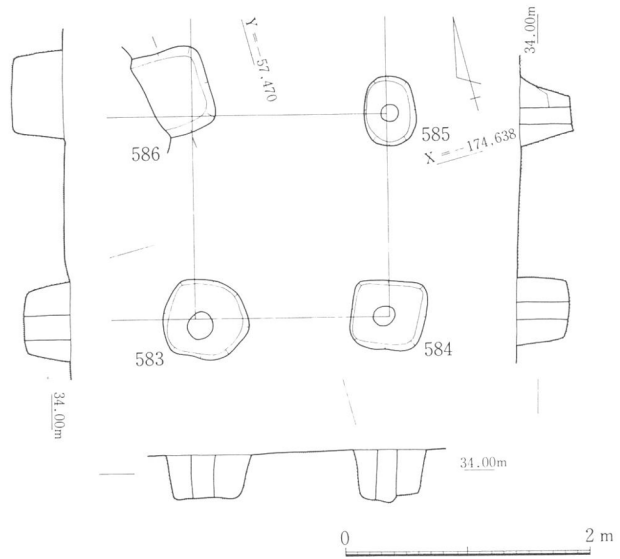
第25図 1007-OB出土土器 (1/4)

杯(72)は565-OP出土で、口径11cmを

測り底部はヘラ切り未調整である。杯(73)は562-OPから出土しており、底部はヘラ切り未調整である。この資料に拠ると建物の時期は陶邑編年第三型式1~2段階に比定しうるが、須恵器杯が細片でなおかつ柱掘形埋土である点を考慮し、ここでは出土遺物の時期を建物の上限としておく。なお、後述の1009-OBよりも近接する時期の須恵器が検出されている。

1008-OB (第26図 図版22)

IV B 西半で検出した。1007-OBと重複する掘立柱建物で、西への続きは654-OSに切られ北への続きは調査区外にあたり全容は不明である。現状では縦柱建物の西南隅を検出したことになる。棟方向は真北より東へ13度振れている。柱間寸法は柱根跡の観察される583・584-OP間で1.5m、584・585-OP間で1.6mを測る。柱掘形は一边40~60cmを測る隅丸方形で、深さは40cm前後を測る。柱根跡径は15~20cmを計測する。

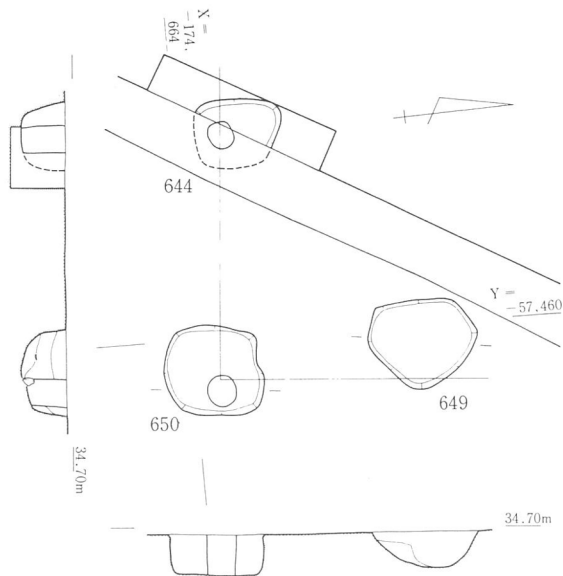


第26図 1008-OB平面・断面図 (1/60)

遺物は未検出だが、棟方向の一致を重視すればI C区1001-OBと同時期かもしれない。

1009-OB (第27・28図 図版30・36)

IV D区東端に位置する。北西隅柱を含む柱穴3個を検出したが大半は調査区外へ続く。柱筋は真北より5度西へ振る。柱筋は直角にはならず、別の形の建物になる可能性がある。柱間寸法は1.6、2.1mを測る。柱根跡は径0.2~0.25m、掘形は一边0.7~0.8m、深さ0.3~0.35mを測る。掘形は隅円方形である。649-OPは柱根の抜取り穴がある。埋土は、柱根跡が、にぶい黄褐色シルトで炭粒を含み、掘形は、上下層はにぶい黄褐色シルト、中層



第27図 1009-OB平面・断面図 (1/60)

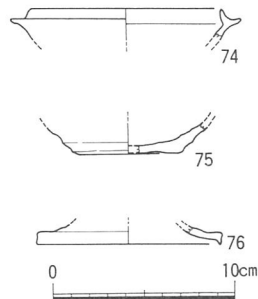
はこれに地山層である黄褐色シルトが混入するブロック土である。650-OPの掘形の下部には柱根に接して根がらみと考えられる石材(116)がある。

出土遺物は土師器41片、須恵器14片を数える。649-OPから(76・164)、650-OPから(74・75・160・165)が出土する。(74~76)は須恵器である。(74)はかえりを持つ杯身で、復原径10.5cmを測る。(75)は底面にへら切り痕を残す。(76)は高杯の脚の端部で下方に拡張する。(160・164・165)は土師器である。(165)は甕の頸部と考えられ内外面に細かい刷毛目を施す。(116)は石材で、長さ21cm、幅11.3cm、厚さ7.6cmの方柱状を呈す。上面と短側面は平滑な面をなし若干の擦り痕を留める。それ以外の面は粗く打ち欠いた跡を見る。転用材の可能性はある。礫質砂岩製である。

図示遺物は陶邑編年II型式6段階で7世紀前半を示す。しかし近接して7世紀の637-OOがあり遺物の混入を招き安いことを配慮して遺構の上限とするにとどめる。

1010-OB (第29図 図版10)

II A-1区の東端で検出した。桁行



第28図 1009-OB出土土器 (1/4)

はこれに地山層である黄褐色シルトが混入するブロック土である。650-OPの掘形の下部には柱根に接して根がらみと考えられる石材(116)がある。

出土遺物は土師器41片、須恵器14

片を数える。649-OPから(76・

164)、650-OPから(74・75・160・165)が出土する。(74~76)は須恵器である。(74)

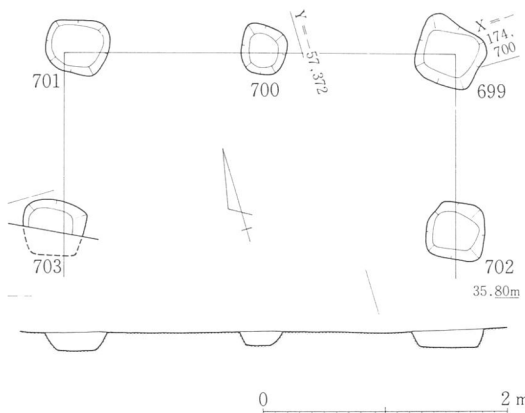
はかえりを持つ杯身で、復原径10.5cmを測る。(75)は底面にへら切り痕を残す。(76)

は高杯の脚の端部で下方に拡張する。(160・164・165)は土師器である。(165)は甕の

頸部と考えられ内外面に細かい刷毛目を施す。(116)は石材で、長さ21cm、幅11.3cm、

厚さ7.6cmの方柱状を呈す。上面と短側面は平滑な面をなし若干の擦り痕を留める。それ

以外の面は粗く打ち欠いた跡を見る。転用材の可能性はある。礫質砂岩製である。



第29図 1010-OB平面・断面図 (1/60)

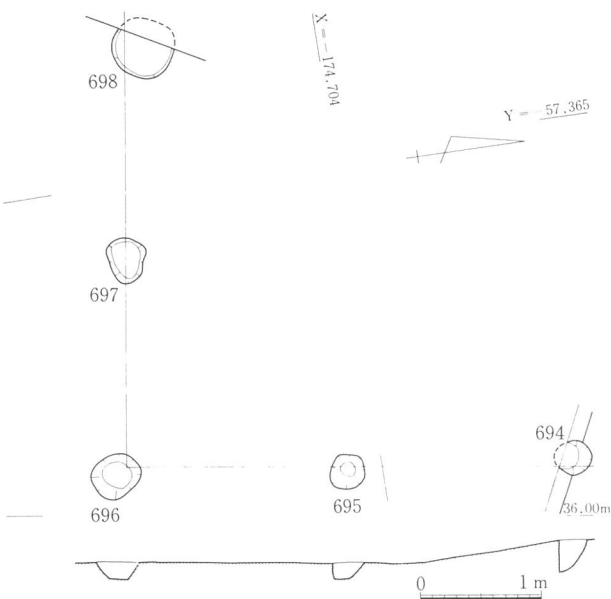
1間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ5度振れている。建物の南への続きは不明である。梁行全長は3.2mになる。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.60m程度である。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一辺30~40cm、深さ10~15cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は未検出である。したがって、正確な時期は不明である。

1011-OB (第30図 図版10)

II A区の1010-OBの東方約10mで検出した。2間以上×2間以上の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ8度振れている。建物の南への続きは不明である。桁行、梁行の区別はつかない。したがって南北、東西棟かは不明である。柱間寸法は1.9~2.0mである。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一辺30~40cm、深さ10~15cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は未検出である。したがって、正確な時期は不明である。

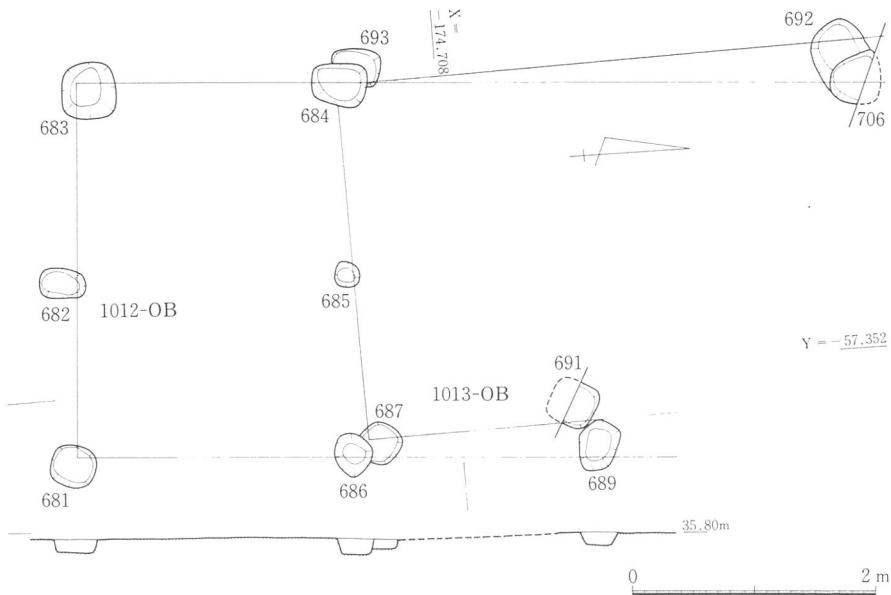


第30図 1011-OB平面・断面図(1/60)

1012-OB (第31図 図版11・33)

II A-2区の1011-OBの東方約10mで検出した。桁行3間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ3度振れている。建物の北への続きは不明である。梁行全長は3.2mになる。柱間寸法は桁行が2.2~2.4m、梁行が1.60mである。柱掘形は隅丸方形を呈するが規模は不均一で、一辺30~40cm、深さ10~15cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は681-OPから土師器2点、黒色土器(内面黒色)1点、682-OPから土師器1点、683-OPから須恵器1点、土師器1点が出土したが、いずれも細片のため器形、時期を決定するのは困難である。

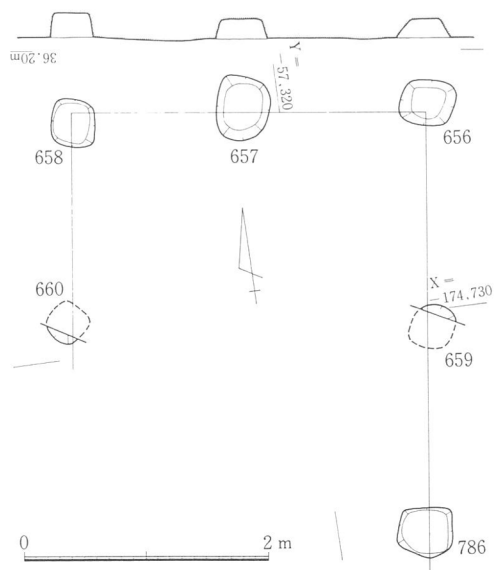


第31図 1012・1013-OB平面・断面図 (1/60)

1013-OB (第31図 図版11)

II A - 2 区の1012-OBと重複して検出した。桁行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より西へ1度振れている。建物の北への続きは不明である。梁行全長は3.20 mになる。柱間寸法は桁行が約2 m、梁行が1.6~1.8mである。柱掘形は隅丸方形と円形とがある。柱穴の規模は隅丸方形のものが一辺30cm程度、円形のものが直径約20 cm、深さはいずれも10cm程度である。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

出土遺物が認められないために、正確な時期を決定できないが、柱穴の切り合関係から1012-OBが新しく、1013-OBが古いと位置づけられる。なお、棟方向は後述の掘立柱列1021-OFと同一である。



第32図 1014-OB平面・断面図 (1/60)

1014-OB (第32図 図版11)

II A - 3 区の東方で検出した。桁行2間

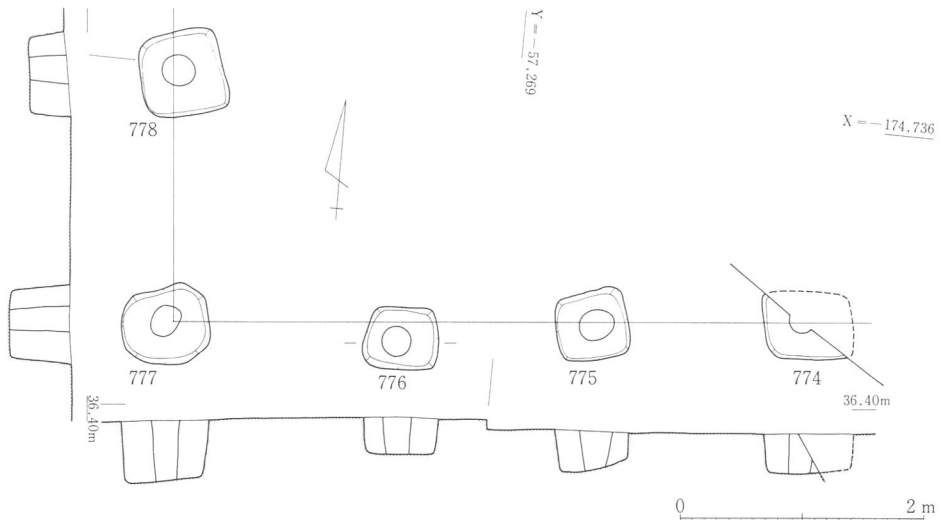
以上、梁行2間の掘立柱建物で棟方向は真北より東へ6度振れている。建物の南への続きは不明である。梁行全長は2.8mになる。柱間寸法は桁行が2.4m、梁行が1.8mである。柱掘形は隅丸方形を呈するが、規模は不均一で、一辺40~50cm、深さ20cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕、柱痕は認められない。

遺物は656-OPから土師器の甕体部片が1点出土したが、細片のため時期は決定できない。

1015-OB (第33図 図版12・33)

II B-1区の西方、1014-OBの西方約20mで検出した。II区で検出した6棟の建物中で最も大型である。建物の角の部分のみを検出したために南北、東西棟どちらとも決め難いが、東西棟の建物とすれば桁行3間以上、梁行1間以上の掘立柱建物で棟方向は真北より西へ7度振れている。建物の北への続きは不明である。柱間寸法は桁行が1.85、1.65、1.7m、梁行は2.0mとばらつきが認められる。柱掘形は隅丸方形を呈するが、規模は不均一で、一辺50~60cm、深さ30~50cmを測る。柱掘形には柱抜き取り痕は認められない。柱痕はいずれも柱掘方のほぼ中央にあり、直径20cm程度である。

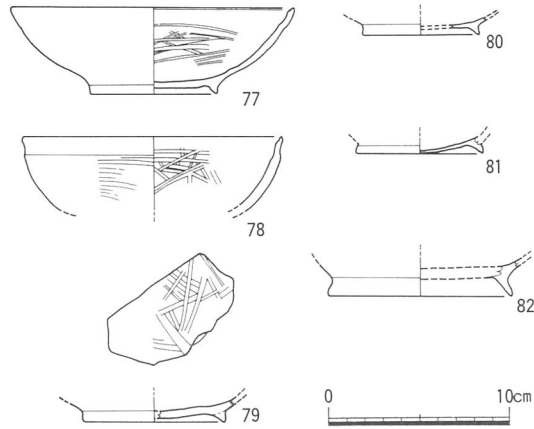
遺物は775-OPから土師器4点、777-OPから土師器4点、778-OPから土師器2点、須恵器1点が出土したが、いずれも細片のため器形、時期は不明である。



第33図 1015-OB平面・断面図 (1/60)

III A 区西部柱穴群（第34・35図 図版16・29・34）

III A 区の西半部に位置する。東西、南北約10mの範囲に分布する建物に復原し得ない49個の柱穴群を総称する。西側は、近世、近代の遺構で切られる。掘形が隅円方形で1辺が約0.7mを測る大形のものと同円ないし、楕円形で径0.3m前後のものに大別できる。埋土は褐色ないし暗褐色シルトで構成される。



第34図 III A 区西部柱穴群出土土器（1/4）

遺物は21個の柱穴から出土し、土師器、須恵器、黒色土器がある。黒色土器は北側の遺構に多い。(77)は406-OP、(78・81)は405-OP、(79・82)は386-OP、(80)は396-OP出土である。図示した遺物は全て黒色土器である。(77~79・81)はA類、(80、82)はB類である。(77)は復原口径15.4cm、器高4.7cmを測る。口縁内面にヨコナデによる段を持ち上端に浅い沈線を巡らす。高台は、断面三角形で八字形に開く。内面はナデの後やや雑な暗紋を巡らす。外面は摩滅が著しいが指押え痕を僅かに残す。明赤褐色(2.5YR5/8)を呈す。(78)は復原口径14.0cmを測る。口縁端面はやや外反し、内面に痕跡状の沈線を巡らす。外面は指押えの後へら磨きする。橙色(5YR6/6)を呈す。(79~81)の高台は(77)と同型で、(82)がやや大振りである。遺物の時期は(77)は森村編年3期に該当し10世紀初頭の年代が与えられる。他のものについても10世紀前半から中頃に納まるであろう。

III A 区東部柱穴群（第36図 図版13）

III A 区の東半部に位置する。東西、南北13mの範囲に分布する建物に復原し得ない34個の柱穴を総称する。規模が径0.2~0.3mで平面円形を呈するものが大多数を占める。これと径0.4m前後のやや大形のもの(355-OP、358-OP、357-OP)には柱根跡が見られるものが多い。埋土はにぶい黄褐色ないし灰黄褐色を呈す。楕円形の373-OP、隅円方形の390-OPは、これらと性格が異なる可能性がある。なお、5020、5021、368、361-OPおよび369、367、366、354-OPは各々東西に延びる柵列の可能性はある。

遺物は9個の柱穴から出土し、土師器、須恵器、製塩土器が認められる。全て細片で時期を限定できないが、明らかに新しい遺物を含まないことから古代に遡る可能性が高い。



第35图 III A区西部柱穴群 (1/120)

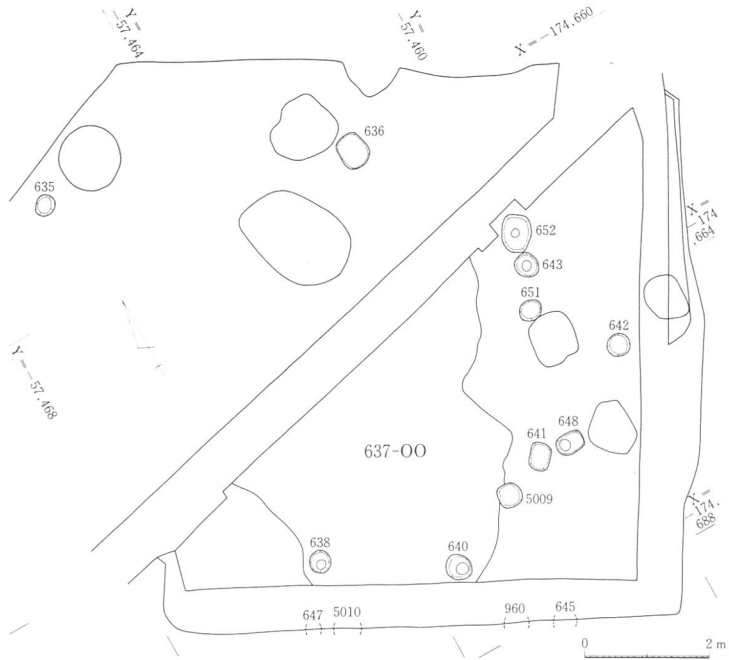


第36图 III A区东部柱穴群 (1/120)

IV D区柱穴群（第37図

図版25・36）

IV D区中央から東側に位置する。東西8 m、南北11mの範囲から検出された、建物に復原できない11個の柱穴を総称する。分布は中央の現水路を挟んで南側に集中するが、北側は後世に削平された可能性が高い。規模は径0.3~0.4mを測り、平面形は円形と隅円長方形の2種類が認められる。



第37図 IV D区柱穴群（1/120）

埋土はにぶい黄褐色を

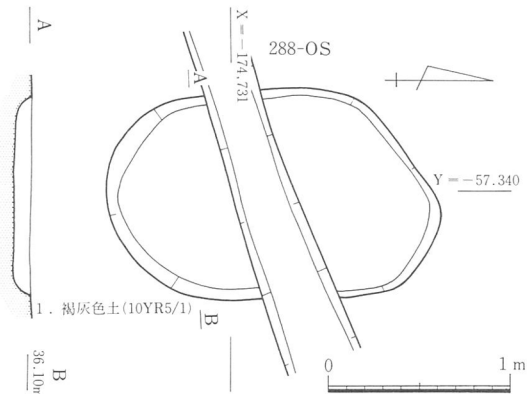
呈するものが多い。638-OP、640-OP、5009-OPは7世紀代の637-00を切る。

遺物は4個の柱穴から出土し、土師器、須恵器がある。(166)は652-OP出土の須恵器で外面は平行叩き上を刷毛調整、内面は同心円叩きを施す。(161)は646-OP出土で、須恵器杯蓋である。遺構群の時期は、7、8世紀代を上限とすると考えられる。

土坑

275-00（第38図）

I C区掘立柱建物1002-OBの東約5 mで検出した。中世期溝288-OSに先行する。長軸1.7m、短軸1.1mを測る楕円形土坑で、軸方向は真北を向く、残存状況は不良で、深さ8 cmを測る。埋土は単一で、炭塊黄褐色粘土塊を含む褐灰色土（10YR5/1）である。遺物は未検出。



第38図 275-00平面・断面図（1/40）

239-00

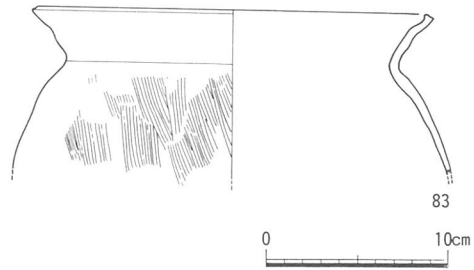
I C区掘立柱建物1002-OBの西約15mにて検出した。遺構の西端は攪乱により消失し、形状には不明な点が残る。溝の可能性が残る。現存長0.9m、幅1m、深さ0.2mを測る。埋土は単一で、細礫混りの黒褐色土（2.5YR3/2）である。遺物は未検出。

655-00（図版34）

II A区の東端部に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径約70cm、深さ28cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色シルト（10YR5/2）層である。遺物は少なく、土師器10点、黒色土器1点である。全て細片のため、器形は不明である。

739-00（第39図 図版34）

II B-2区の西端部に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は一層で、オリーブ褐色シルト（2.5YR4/4）である。

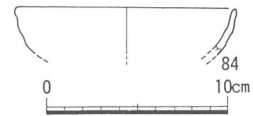


遺物は土師器の甕3点、須恵器の器形不明2点である。土師器甕（83）は口径22cmを測る。刷毛目下に成形時の指頭圧による凸凹が残る。

第39図 739-00出土土器（1/4）

377-00（第40・41図 図版15・34）

III区西側に位置する。南半分を道路側溝で破壊される。平面形は概ね東西方向に軸を持つ楕円形を呈し、長径約1.05m、短径0.87m、深さ0.43mを測る。断面は摺鉢形を呈す。埋土は上下2層に別れ上層はにぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/3）、下層は同色（10YR4/3、10YR5/4）砂質シルトのブロック土である。



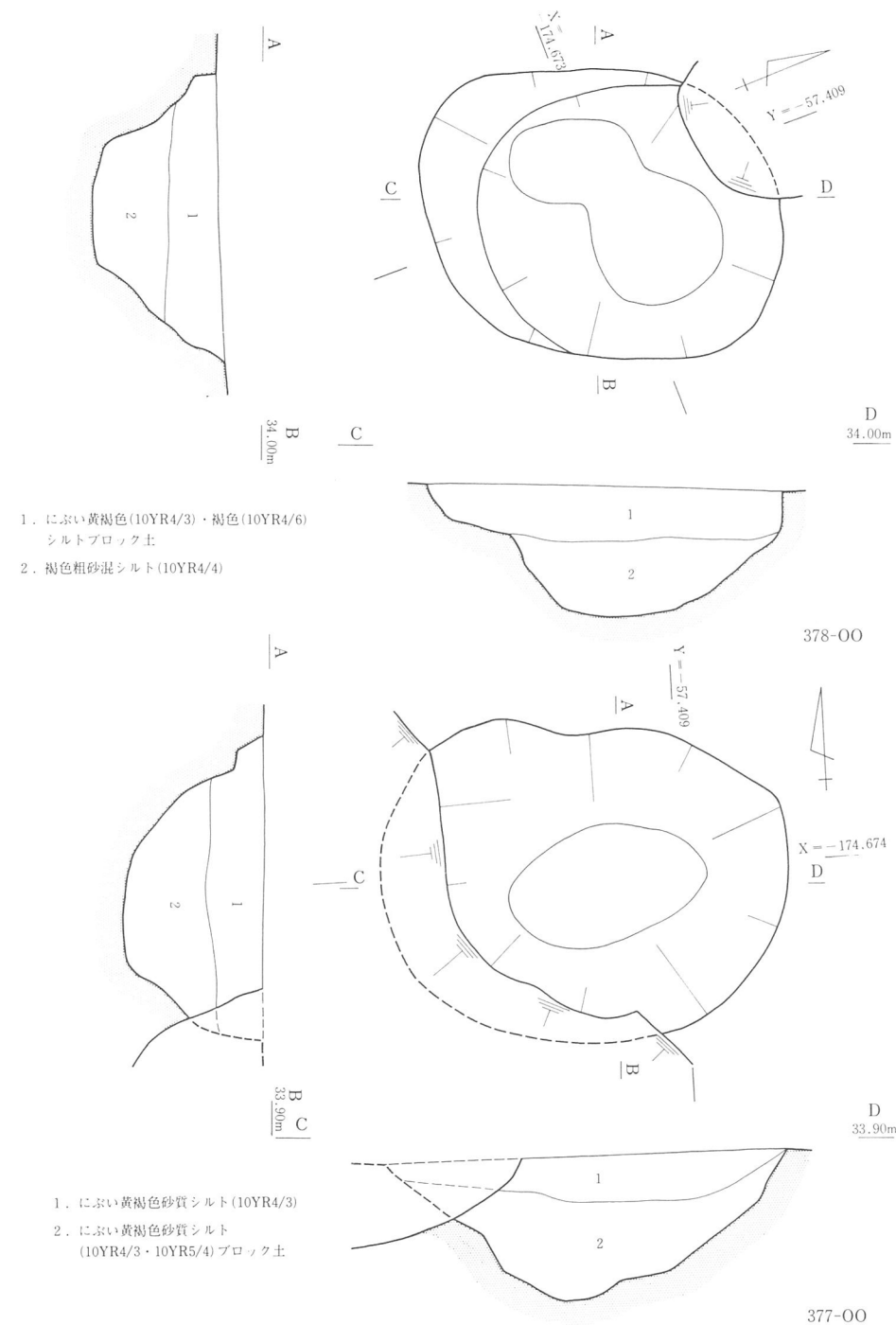
第40図 377-00出土土器（1/4）

出土遺物は、土師器37片、須恵器7片、黒色土器2片、製塩土器1片を数える。（84）は須恵質の埴口縁部である。口縁端部を丸く肥厚させその下をヨコナデでくぼます。復原口径12.0cmを測る。径0.5mm以下の白色砂粒を含み断面は灰色（10YR6/1）、口縁上半外面は灰色（5Y1/5）を呈する。黒色土器はすべてB類である。

（84）は、篠窯産の可能性が高く10世紀代であり、遺構年代の上限を示すと考えられる。

378-00（第41・43図 図版15・29）

III A区西側に位置する。平面形は南北に主軸を持つ楕円形を呈し、長径約1.05m、短径0.83m、深さ0.37mを測る。断面は摺鉢形を呈し、底面が8字形をなす。埋土は上層がに



- 1. にぶい黄褐色(10YR4/3)・褐色(10YR4/6)シルトブロック土
- 2. 褐色粗砂混シルト(10YR4/4)

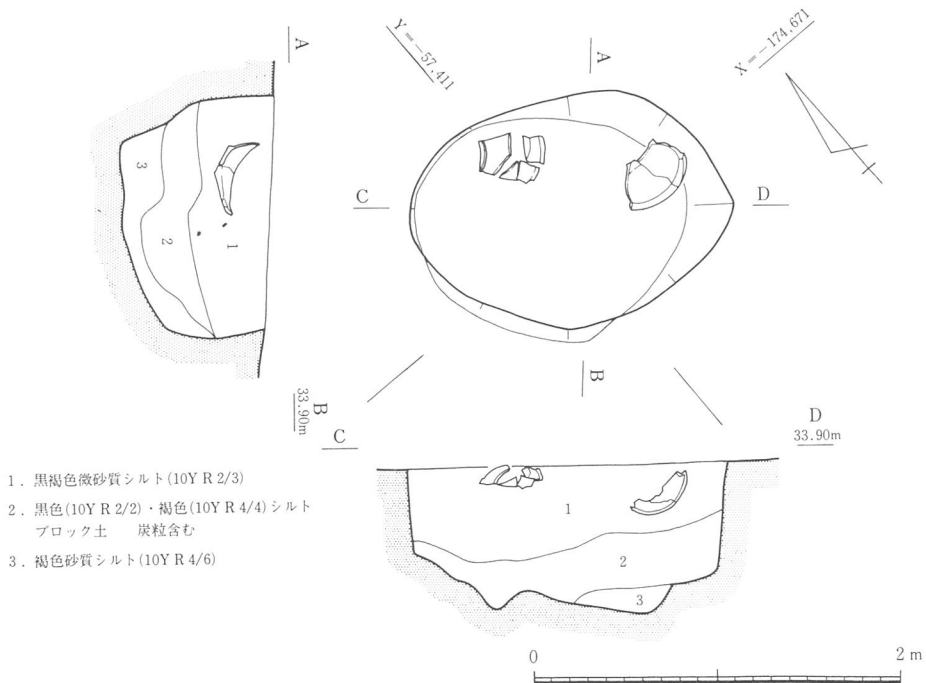
- 1. にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3)
- 2. にぶい黄褐色砂質シルト(10YR4/3・10YR5/4)ブロック土

第41図 377・378-00平面・断面図 (1/40)

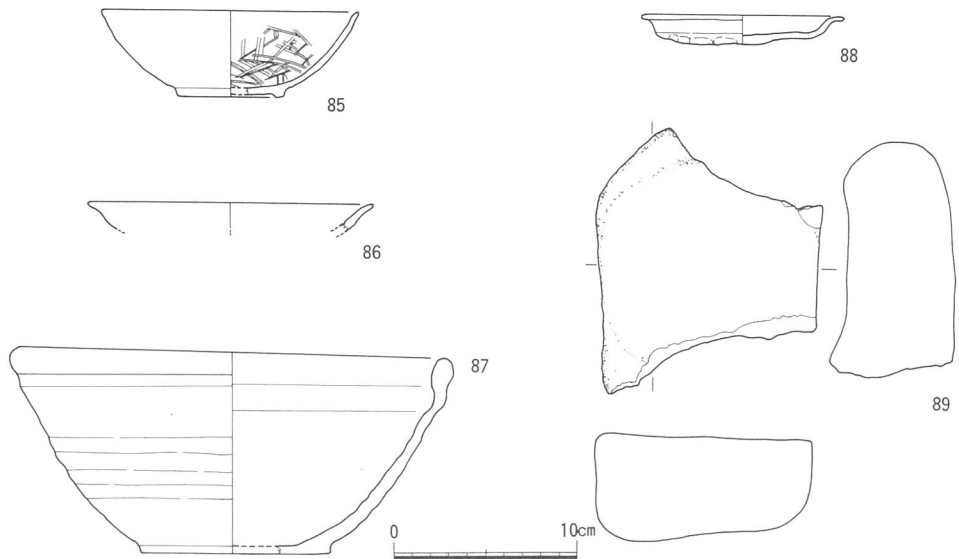
ぶい黄褐色シルト (10YR4/3) と褐色 (10YR4/6) のブロック土で、下層は褐色粗砂混シルト (10YR4/4) である。出土遺物は土師器35片、須恵器4片、黒色土器5片、石皿1片を数える。(88)は土師器の皿で復原口径11.0cm、器高1.6cmを測る。端面は外側へ折れ曲がる。底部内外面は指押さえ痕が多数残りその上を撫でる。にぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、径2mm以下の白色砂粒、雲母を含む。石皿 (89)は上下端を欠損するが、現存長14.3cm、幅12.3cm、厚さ5.8cmを測る。上面の中央部が平端面をなし使用による光沢を持つ。側面にも部分的に擦り跡が見られる。細粒砂岩製で下面は礫質になる。(88)は10世紀末から、11世紀初頭に比定され、他の遺物とも矛盾なく遺構はこの時期と考えられる。

379-00 (第42・43図 図版15・29・30)

ⅢA区西側に位置する。平面は東西に主軸を持つ楕円形を呈し、長径0.88m、短径0.65m、深さ0.4mを測る。断面は、逆台形を呈し、一部で袋状を呈する。埋土は3層に分かれる。上層は黒褐色微砂質シルト (10YR2/3) で厚さ13~26cm、中層は黒色 (10YR2/2) ないし褐色 (10YR4/4) シルトのブロック土で炭粒をかなり多く含み、厚さ10~15cm、下層は褐色砂質シルト (10YR4/6) で厚さ約6cmを測る。上層中からは、練鉢 (87) が割れた状態で出土している。



第42図 379-00平面・断面図 (1/40)



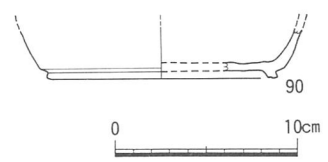
第43図 378・379-〇〇出土遺物 (1/4)

出土遺物は、土師器71片、須恵器11片、黒色土器22片、製塩土器1片、緑釉2片を数える。(85)は黒色土器A類の碗である。復原口径14.0cm、器高5.8cmを測る。口縁内外面は強くヨコナデし段を作る。高台は断面逆台形で低い。体部外面はへら磨きし、内面は暗紋を巡らす。胎土に白、黒、赤色粒を含む。(86)は緑釉の皿である。復原口径15.8cmを測る。見込み部分に浅い1状の沈線を巡らし段とする。釉はほとんど剥離する。胎土は浅黄色(10YR8/3)を呈し、精良で軟質である。(87)は須恵質練鉢ではほぼ完形である。口径23.2cm、器高11.2cmを測る。口縁端部は丸みを持って肥厚し玉縁状を呈す。底面は平らで糸切り痕を残し、体部内外面は回転ナデを施す。灰白色(10YR8/1)を呈し径1mm以下の白黒微粒を含む。やや軟質である。

時期は、(85)が森村編年V期に該当し10世紀後葉とされる。(87)は篠窯跡群黒岩1号窯期の特徴を備え10世紀第4半期とされる。^(注2)^(注3)両者の時期はほぼ一致しており、遺構の年代と考えて大過無かろう。

610-〇〇 (第44図 図版35)

IV B区で検出した。800-OPに後出する。長軸1.05m、短軸0.9m、の楕円形土坑で、深さ0.2mを測る。断面は弧状を呈し、埋土は暗褐色砂質土(7.5YR3/3)の単一層である。遺物は土師器・須恵器の細片で、図化資料

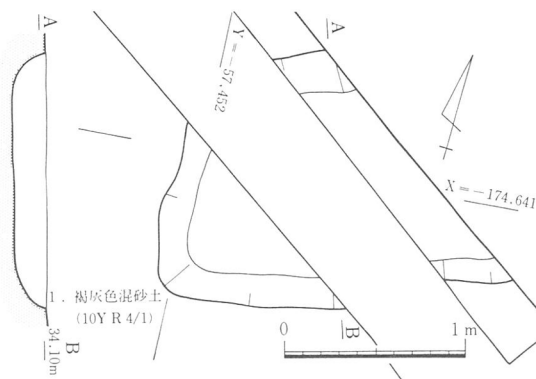


第44図 610-〇〇 出土土器 (1/4)

に須恵器杯(90)がある。ナデ調整の底部に「ハ」の字形の高台が付く。

614-00 (第45図)

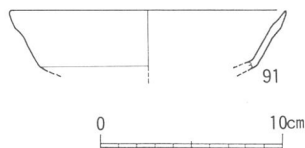
IV B区掘立柱建物1005-OBの東約1mで検出した。調査区外へ伸びるが、長軸2m以上、短軸1.38mを測る隅丸長方形の土坑である。断面は偏平なU字形を呈し、深さ20cm。埋土は黄褐色粘土(地山土)をブロック状に含む褐灰色混砂土(10YR4/1)である。炭塊がみられる。遺物は土師器片が検出されている。



第45図 614-00平面・断面図(1/40)

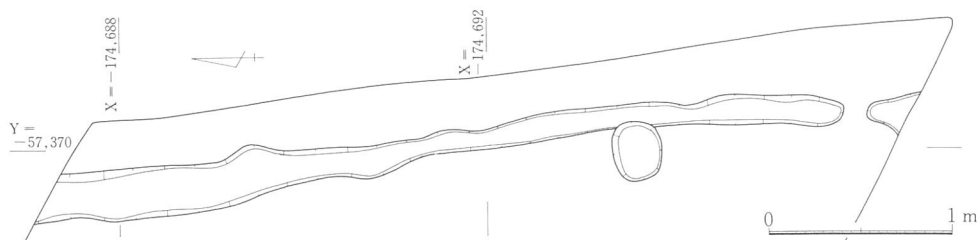
347-OS (第46・47図 図版16・34)

III A区東端に位置する。直線的に延びる溝で延長9.8mを検出した。幅0.2~0.5m、深さ0.05~0.1mを測り、北側でやや広く深くなる。方向は真北より西に5度振る。南側で長さ0.25mに渡り途切れる部分がある。断面は浅いU字形を呈す。埋土は灰黄褐色砂質シルト(10YR5/2)で褐色斑(10YR4/4)を含む。建物1003-OBに伴う柱穴349-OPに切られる。



第46図 347-OS
出土土器(1/4)

出土遺物は須恵器2片のみである。(91)は杯身で、体部はやや外反し復原口径15.0cm、器高3.3cmを測る。時期は7、8世紀代と推定される。遺構も切り合から同様に考えられる。



第47図 347-OS平面図(1/80)

掘立柱列

1021-OF (図版8)

I C区の中央、II A区1010-OBの南23mで検出した。柱間4間の掘立柱列で、現存長6.5mを測る。柱掘形は不整円形で径25~50cmを測る。柱間寸法は不揃いで概略数値で1.2~

1.9mを測る。軸方向は真北より西に3度振れている。遺物は未検出だが、①掘形埋土が掘立柱建物のそれに共通する②軸方向の一致をみる掘立柱建物（1013-OB）があるの2点より当該期に含めた。

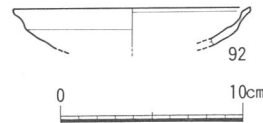
第5節 鎌倉時代～室町時代

〈概況〉 耕作遺構（溝）が主体で、他に柱穴群、掘立柱列、土坑等がある。溝は単独に走行するⅠ類と2条併走するⅡ類に区別でき、その内溝Ⅱ類は条里地割に伴う畦溝の可能性が指摘できる。しかし溝Ⅱ類と同時代性を有する耕土は存在しない。遺構の上位に位置する中世後期の耕土（基本層序第Ⅱ-2層）が形成される際に削平を受けた結果であろう。

柱穴群

ⅢB・ⅢC区柱穴群（第48図 図版17・18）

ⅢB・ⅢC区に分布する柱穴群である。帯状に検出されているため建物の復元は行わなかった。総数61個を数え、平面形は円形・隅丸方形を基本とし径30～40cmを測るものが多い。柱穴は埋土により、〈A類〉にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）〈B類〉褐色砂質土（10YR4/1）〈C類〉黒褐色砂質土（7.5YR3/2）に大別される。傾向として、A・C類が多くA類はⅢB区にC類はⅢB区東端からⅢC区に分布している。遺物はⅢC区483-OP（C類）のみ検出されている。土師器皿、瓦器碗、瓦質甕の破片がある。（92）は土師器皿で、径13cmを測る。形態的に13世紀前半～中頃と推定される。



第48図 483-OP
出土土器（1/4）

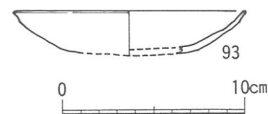
土坑

31-OO（第50図）

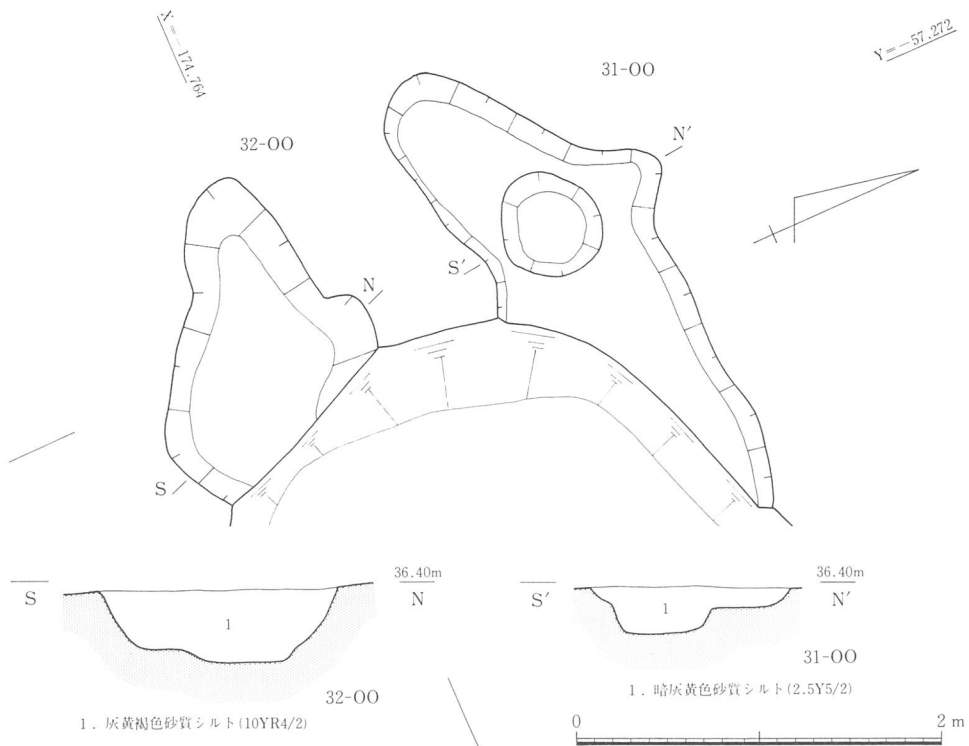
ⅠB区の東端に位置する。現存長3.1m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。平面形は不整な長楕円形である。断面は浅いU字形を呈し、底面には径0.6mの円形の落込みを伴う。埋土は暗灰黄色砂質シルト（2.5Y5/2）である。遺物は、瓦器1片を出土している。

32-OO（第49・50図 図版33）

ⅠB区の東端に位置する。東側を攪乱坑に切られるが、現存長1.5m、幅1.3m、深さ0.4mを測り、平面は現状では不整な楕円形を呈す。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は灰黄褐色砂質シルト（10YR4/2）である。出土遺物は



第49図 32-OO
出土土器（1/4）



第50図 31・32-00平面・断面図 (1/40)

土師器 3片、瓦器 6片を数える。(93)は瓦器皿で復原口径12.6cm、器高2.3cmを測る。体底部は丸みを持ち端面のみヨコナデする。遺物の時期は13世紀代であろう。

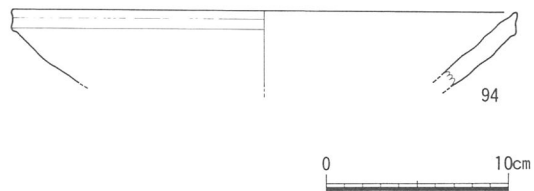
475-00

III B区東端で検出した。長軸1.4m、短軸85cm、深さ12cmを測る隅丸長方形の土坑である。断面は偏平なU字形を呈し、埋土は黄褐色混砂土(2.5Y5/4)である。焼土塊や炭塊が混じるのが特徴である。遺物は未検出。

溝 I 類

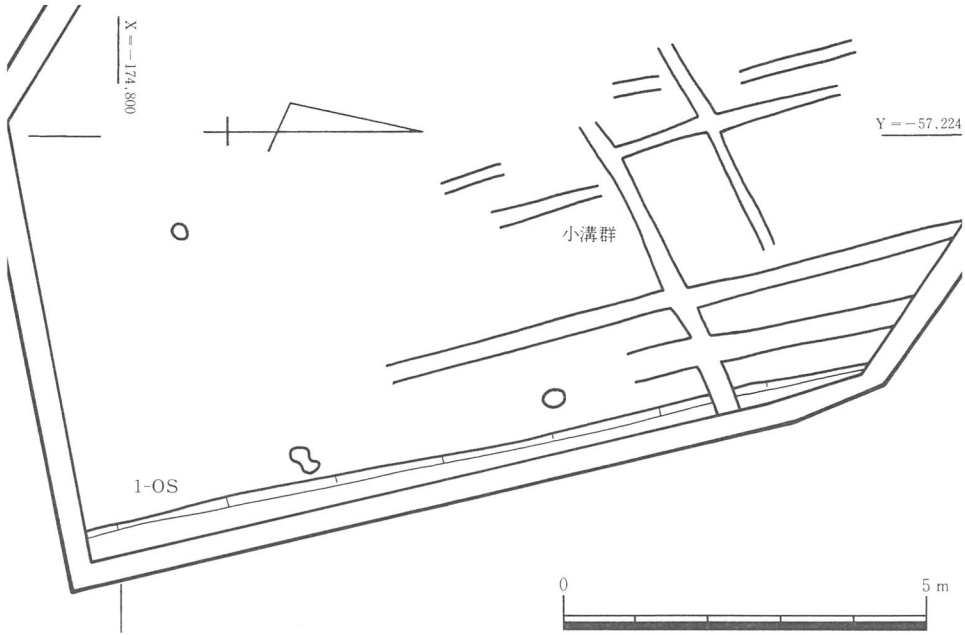
1-OS (第51・52図 図版2)

I A区東端で検出した。調査区東壁に沿って検出されているので全容は不明。現存長12m、幅80cm以上、深さ15cmを測る。走行方向は真北より西へ15度振れている。断面は偏平なU字形で、埋土は黄褐色砂+細礫(5Y6/1)である。



第51図 1-OS出土土器 (1/4)

遺物には、土師器、須恵器、緑釉皿、

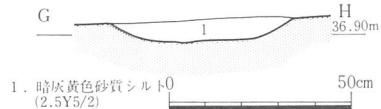


第52図 1-O S平面図 (1/100)

瓦器塚、瓦質ねり鉢の破片が検出されている。瓦質ねり鉢 (94) は口径27.7cmを測り、焼成は軟質である。摩耗が進み外面の調整は不明だが、形態的に15世紀前半～中頃と推定される。遺構の検出面は基本層序第IV層上面で上位に同第II b層が位置する。遺構の時期を先の瓦質ねり鉢で15世紀前半～中頃とすると、本遺構が基本層序第II b層の下位に位置する遺構群中で最も新しく位置付けられる。従って、本遺構をもって基本層序第II b層の上限が決定されることになる。

146-OS (第53・59図)

I B区西側に位置する。幅約50cm、深さ6～8cmを測る。直線的に延び、方向は真北より77度東へ振る。



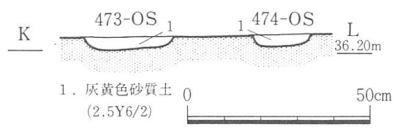
第53図 146-O S断面図 (1/20)

埋土は暗灰黄色砂質シルト (2.5Y5/2) で、明黄褐色斑 (10YR6/8) を含む。

出土遺物は土師器1片、須恵器1片、瓦器1片がある。細片のため時期は不明である。

473-OS (第54・59図)

III B区東端で検出した。474-OSに先行する。調査区外に伸びるが、現存長4.5m、幅40～50cm以上、深さ8cmを測る。埋土は灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) の単一層である。遺物は未検出。



第54図 473・474-O S断面図 (1/20)

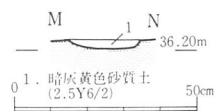
474-OS (第54・59図)

ⅢB区東端で検出した。473-OSに後出する。調査区外に伸びるが、現存長4.3m、幅20～50cm、深さ7cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は単一で473-OSに共通する灰黄色砂質土(2.5Y6/2)である。遺物は未検出。

472-OS (第55・59図)

ⅢB区東端で検出した。473-OSに先行する。調査区外に伸びるが、現存長3m、幅40cm、深さ6cmを測る。

断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土(2.



5Y6/2)の単一層。遺物は未検出。

第55図 472-OS断面図(1/20)

溝Ⅱ類

87-OS (第58・59図 図版4)

I B区西側に位置する。幅0.7～1.0m、深さ0.05～0.07mを測る。直線的に延びるが、検出範囲の中央部で2条に別れ、長さ7.5m、幅0.8mのテラスを作る。135-OSと平行関係にある。方向は真北より5度西へ振る。埋土は灰黄色砂質シルト(2.5Y6/2)で、褐色斑(2.5Y4/4)を含む。

出土遺物は土師器3片、須恵器7片、瓦器3片がある。すべて小片であるが、遺構は、瓦器を含むことから12世紀を上限とするであろう。

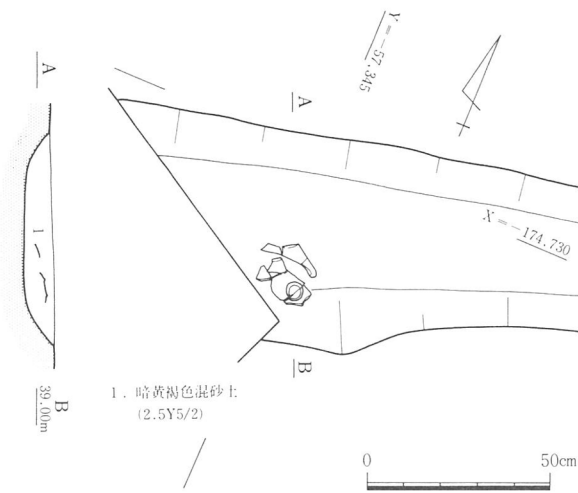
135-OS (第58・59図)

I B区西側に位置する。幅0.6m、深さ0.11mを測る。直線的に延び、87-OSの東側に幅1.5mのテラスをおいてほぼ平行する。南端は攪乱坑に切られその南側では検出されない。埋土は灰黄色砂質シルト(2.5Y6/2)で、黄褐色斑(2.5Y5/6)を含む。遺物は出土しなかった。

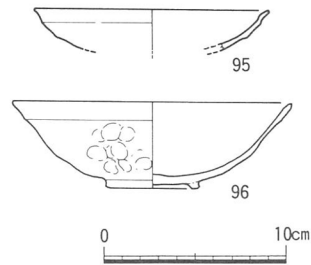
244-OS (第56・57・58・59図 図版7・29・33)

I C区からⅢB区にかけて検出した。両区間に位置するⅡB区では遺構面の削平が著しく溝の続きは未検出に終わっている。真北より73.5度東へ振れる方向で走行し、東接する288-OSとは約1～1.6mの間隔で平行する位置関係にある。現存長34m、幅20～50cm、深さ4～10cmを測り、溝底はI C区西端がⅢB区東端より約5cm高い。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は暗黄灰色混砂土(2.5Y5/2)の単一層である。

遺物は僅か、土師器・須恵器・瓦器の細片の他、土師器皿(95)と瓦器埴(96)がある。瓦器埴(96)は溝の東端(I C区)にて溝底より少し浮いた状態で検出されている。



第56図 244-OS 土器出土状況 (1/20)



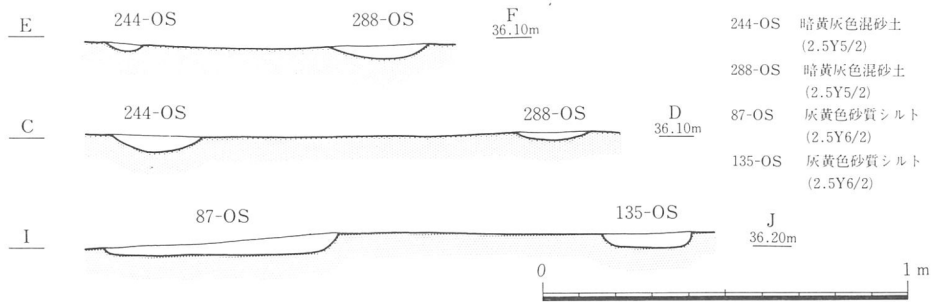
第57図 244-OS 出土土器 (1/4)

口径15.2cm、器高4.7cmを測る。暗紋は施されているが、摩耗のため図化はできない。

遺構の時期は先の遺物より13世紀前半と推定される。

288-OS (第58・59図 図版7)

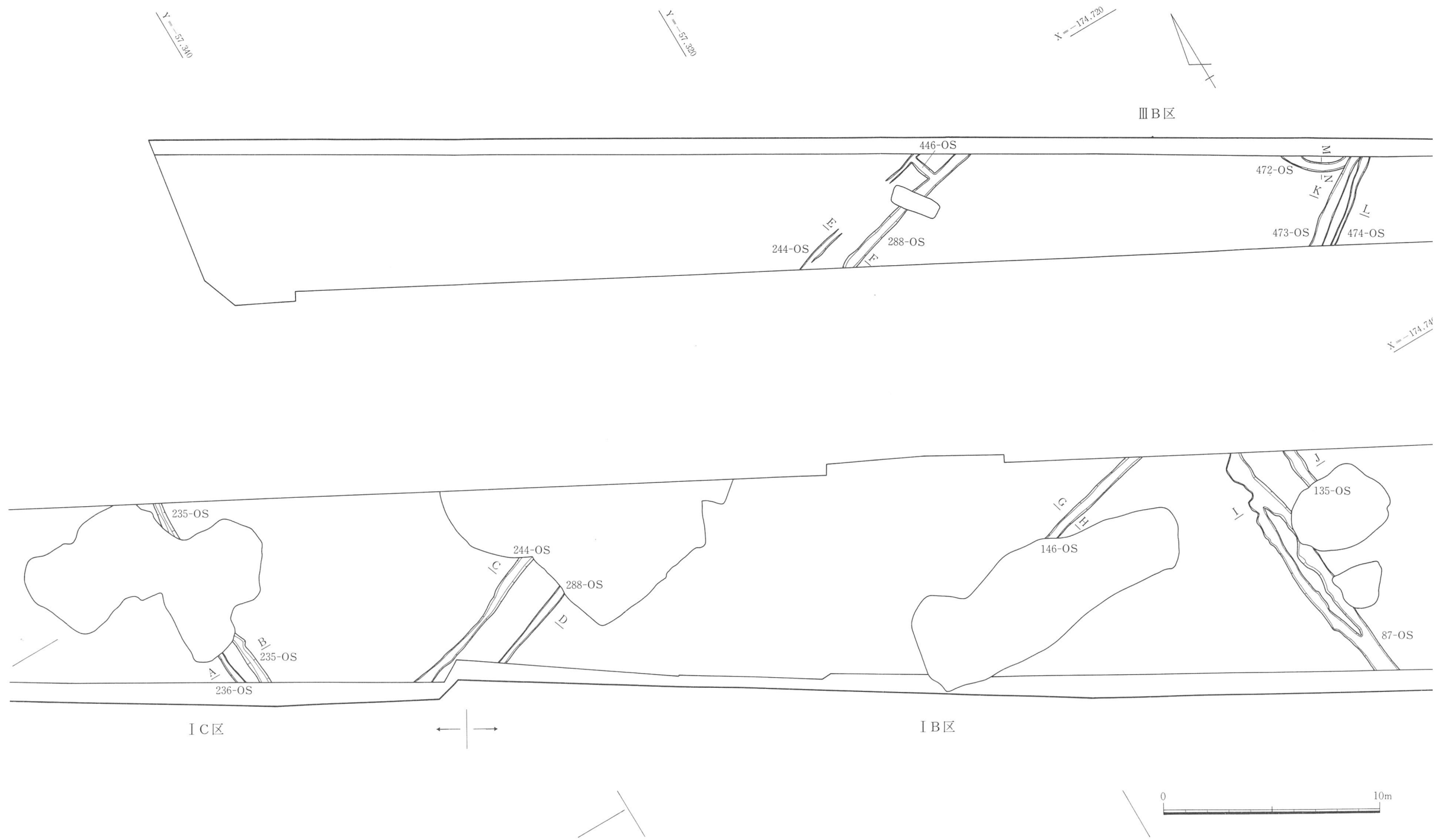
I C・II B・III B区にかけて検出した。244-OSと併走する溝で、III B区西端にて446-OSを介して244-OSと連絡している。現存長32m、幅20~50cm、深さ3~10cmを測り、溝底は446-OS同様I C区西端がIII B区東端より約5cm高い。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は244-OSに共通する暗黄灰色混砂土の単一層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の細片が検出されている。



第58図 87・135・244・288-OS 断面図 (1/20)

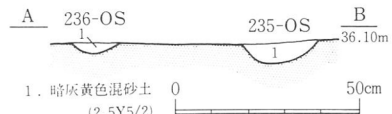
235-OS (第59・60図 図版8)

I C区で検出した。II B区では溝の伸張が予測されたが、遺構面の削平が著しく溝の続きは未検出に終わっている。走行方向は真北より4度西に振れている。現存長9.5mを測



第59图 I B · I C · III B区溝 I · II類平面图 (1/200)

るが、溝の中ほどは攪乱坑の存在により消失している。幅40cm、深さ10cmを測り、断面は緩やかな弧状を呈している。埋土は244-OSに共通する暗灰黄色混砂土で、単一層である。遺物は土師器・須恵器細第60図



236・235-OS断面図 (1/20)

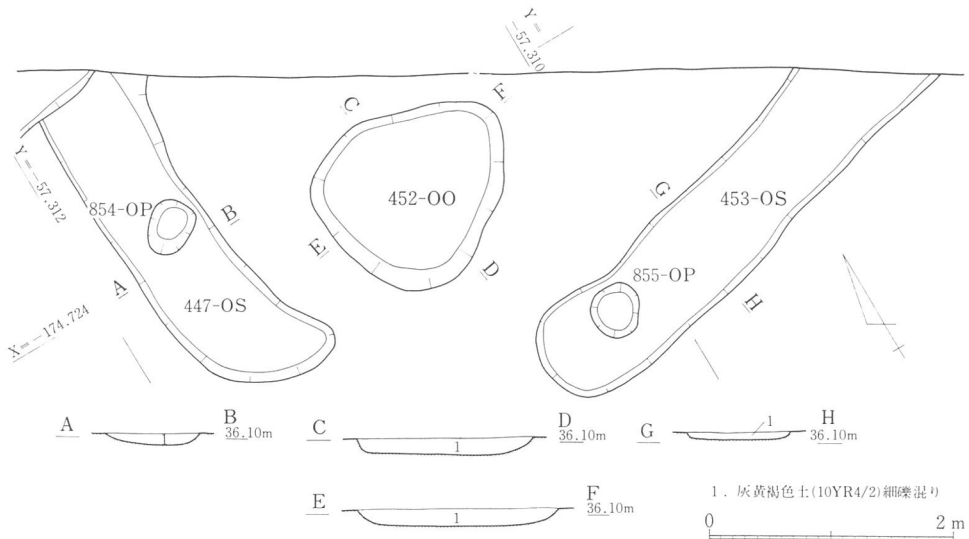
236-OS (第59・60図 図版8)

I C区235-OSの西隣で検出した。攪乱坑により大半は消失している。本来的には215-OSと併走する位置関係にあると推定される。現存長1.5m、幅30cm、深さ6cmを測る。断面は緩やかな弧状を呈し、埋土は235-OSに同様に244-OSに共通する。暗灰黄色混砂土の単一層である。遺物は未検出。

不明遺構

875-OX (第61図)

III B区西半で検出した。288-OS、854・855-OPに先行する。447-OS・453-OSの2条の溝と土坑452-OOで構成される遺構である。447-OSは現存長3m、深さ10cm、453-OSは現存長4m、深さ6cmを測る。ともに断面は偏平なU字形を呈し、埋土は細礫混りの灰黄褐色土(10YR4/2)である。土坑452-OOは、長軸1.65m、短軸1.5mを測り不整形円形を呈する。深さ15cm、埋土は溝に共通する細礫混りの灰黄褐色土である。遺物が未検出で時期は不明だが、288-OSに先行することから13世紀前半を遡ることは明らかである。



第61図 875-OX平面・断面図 (1/60)

掘立柱列

1031-OF

ⅣA区西半で検出した。2間の柱間で現存長2.2mを測る掘立柱列である。柱掘形は不整形円形で径30～50cmを測る。柱根跡径は875-OPで10cm、858-OPで20cmを測る。周辺は攪乱が著しく前後の伸びが不明で、掘立柱塀か掘立柱建物の柱列か判断できない。遺物は未検出だが、軸方向がN-18°-Wを測り条里地割りに一致することから当該期に含めた。

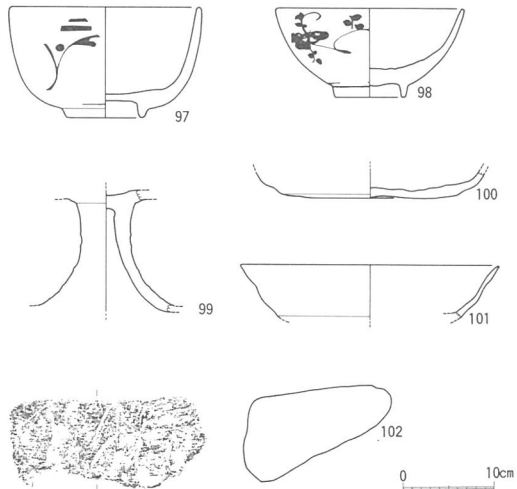
第6節 江戸時代

〈概況〉 遺構には小溝群、溝、井戸、土坑がある。第5節では耕作に伴う溝をⅠ・Ⅱ類に区別したが、ここでは小溝群を鋤溝・畝溝とし、溝Ⅲ類として扱う。又、基本層序第Ⅱ-2層は当該期の耕土であり、溝Ⅲ類がこれに伴う耕作痕と考えられる。

井戸

588-OW (第62・63図 図版24・25・30・35)

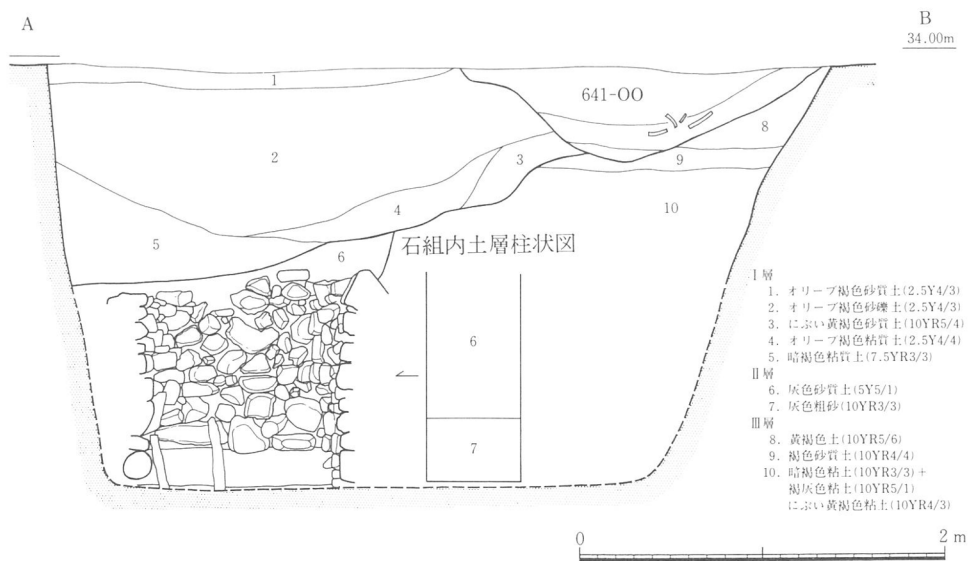
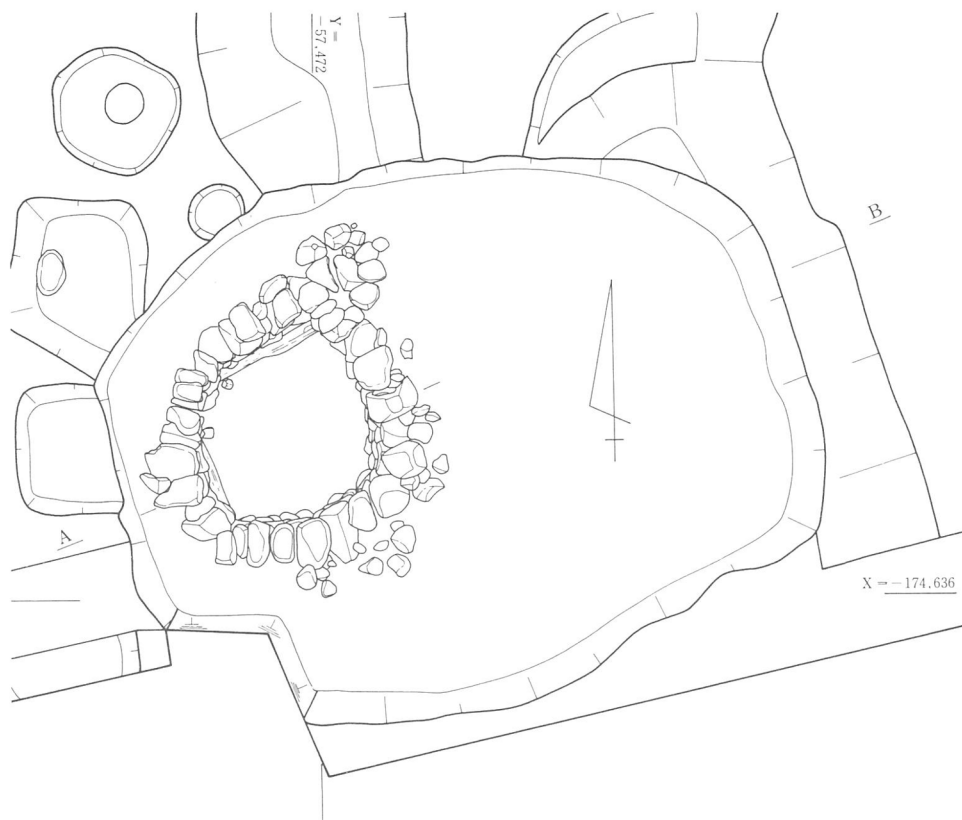
ⅣB区西端で検出した。西端は641-00に切られている。長軸4.2m、短軸3mを楕円形掘形の東端に石組が設けられている。石組は上部を欠失し、現存高1.2mを測る。石積は円礫・角礫の小口積を原則とし、平面形は一辺約1mを測る隅丸方形を呈する。石積の起点を対となる二隅に置くため、壁面の東と西側は緩やかな曲面を呈している。石積は勇水層である明青灰色粗砂+シルトから始められているが、連続する東壁と南壁は胴



第62図 588-OW出土遺物 (1/4)

木組を基礎としている。埋土は3層に大別できる。第Ⅰ層は石組上部抜き取り穴埋土で、円礫を多量に含むオリーブ褐色土を主体としている。第Ⅱ層は石組内部に投入された土で、上位に灰色砂質土が下位に灰色粗砂が用いられている。出土遺物の大半は先の灰色砂質土出土である。第Ⅲ層は掘形埋土で、地山土(黄褐色粘土)をブロック状に含む暗褐色土である。

遺物の主体は18世紀代の陶磁器で、一部に須恵器高杯(99)、須恵器杯(100・101)、軒平瓦(102)など7～9世紀の資料もみられる。軒平瓦は瓦当が剝離し風化が進行してい



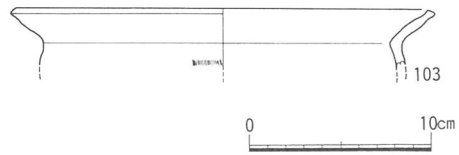
第63図 588-O W平面・断面図 (1/40)

る。色調は灰白色を呈し、焼成は軟質である。調整不明。18世紀代の陶磁器には、波佐見焼埴（97・98図版35-156・157）・現川焼・唐津焼など肥前焼、丹波焼、堺播鉢（図版35-158）、信楽焼播鉢（図版35-155）、美濃瀬戸系などがある。量的には波佐見焼の存在が注意をひく。^(注4)

土坑

616-OO（第64・67・68図 図版23・35）

IV B区東端617-OSの上位に位置する。617-OS埋積後に実施された周辺くぼ地の整地の跡である。整地土は5~10cmの円礫を多量に含む褐色土（10YR4/4）および黄褐色土（10YR5/3）で、固くしめられている。厚さ30~60cmを

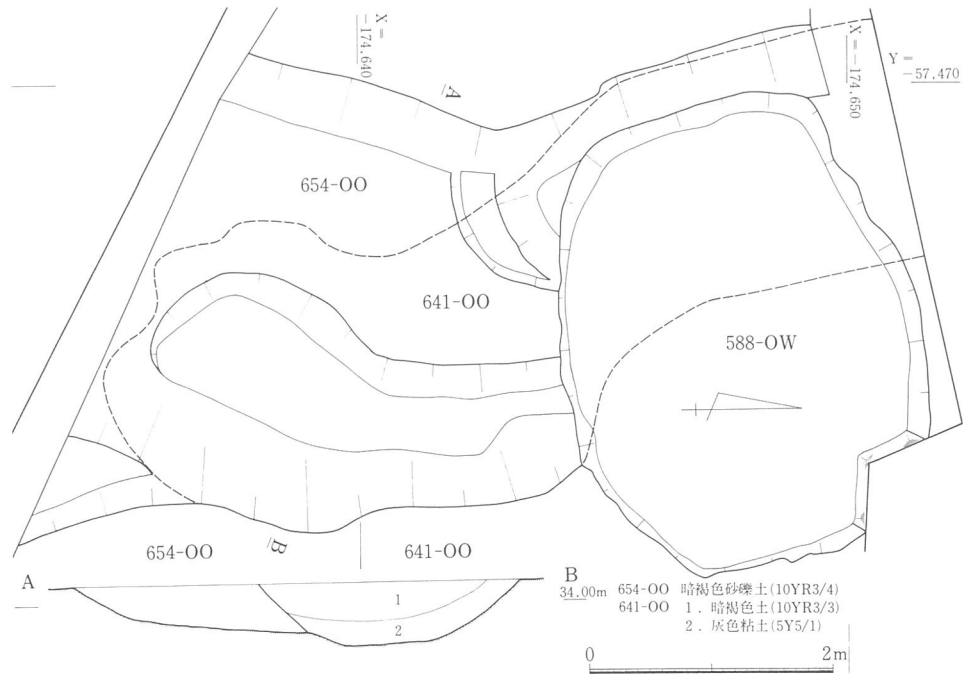


第64図 616-OO出土土器（1/4）

測る。遺物の大半は奈良時代~平安時代にかけての土師器・須恵器である。（103）は土師器甕で、口縁端部の巻き込みは強くない。体部外面刷毛目調整。口径22.4cm。

654-OO（第65図 図版20）

IV B区西端で検出した。641-OOに先行する。形状には不明な点もあるが、調査区南

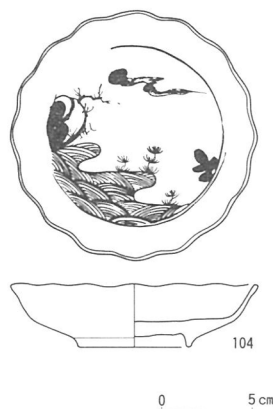


第65図 641・654-OO平面・断面図（1/60）

壁断面の観察に拠ると、深さ40cmを測る落ち込み状を呈している。埋土は暗褐色砂礫土（10YR3/4）の単一層で、遺物は染付の破片が検出されている。

641-OO（第65・66図）

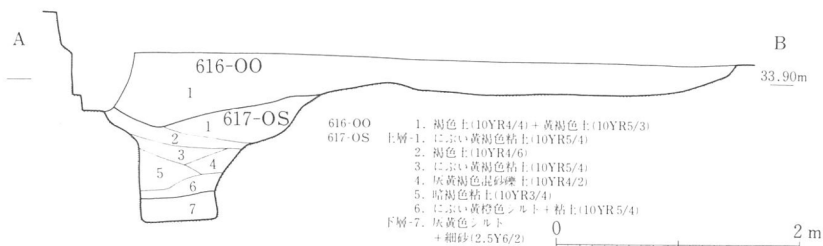
IV B区西端で検出した。654-OO、588-OWに後出する土坑で、現存長6.7m、幅2～2.5m、深さ50cmを測り、溝状を呈する。埋土は、上層暗褐色土（10YR3/3）、下層灰色粗土（5Y5/1）に分離でき、下層には多量の近世瓦が投棄されていた。遺物は瓦の他に、17～18世紀代の陶器、磁器がある。（104）は伊万里焼ヒザ皿で、17世紀後半。



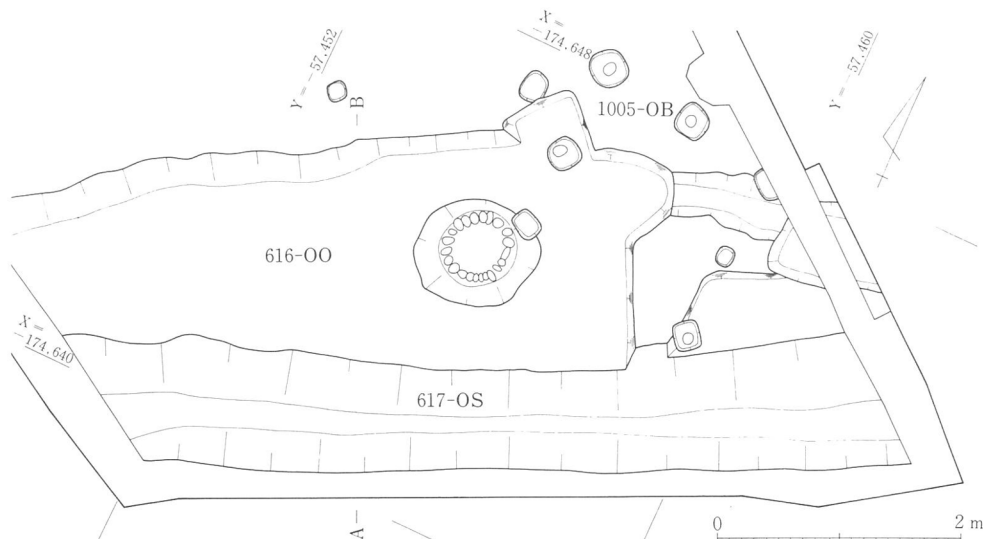
第66図 641-OO
出土土器（1/4）

溝

617-OS（第67・68・69図 図版23・29・36）



第67図 616-OO、617-OS断面図（1/60）

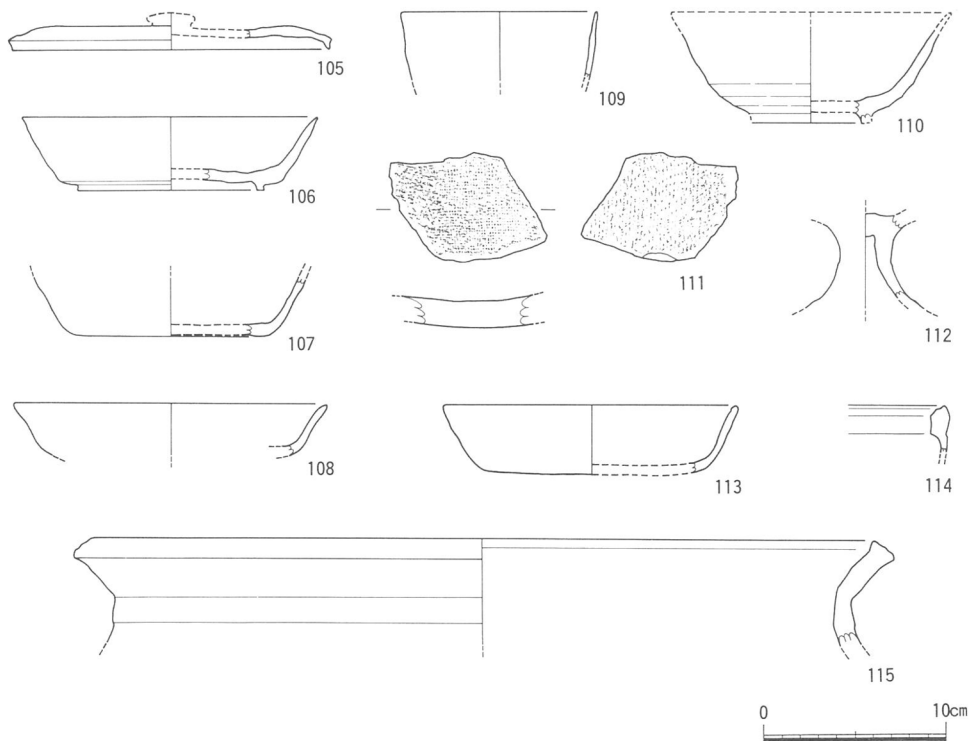


第68図 616-OO、617-OS平面図（1/120）

IV B区東端で検出した。真北より東へ65度振れて走行するが、調査区外へ伸びたり上位で整地が実施されていることなどから形状・規模に関しては不明な点が多い。現存長13.5m、幅2m以上、深さ1.8m以上を測る。断面はロート状を呈し、上半は斜方向に下半は鋭く凹形に掘削されている。埋土は上層（1～6層）、下層（7層）に分離される。上層は褐色・黄褐色粘土など地山土の混合で、下層はシルト、細砂の混合土である。

遺物は上層、特に3層に集中して検出されている。須恵器、土師器、青磁、陶器、瓦など時期別には7世紀から17世紀までの時間幅があり、量的には8～9世紀の資料が多い。

(112) は高杯脚柱部で杯部と脚裾部を欠損する。中村編年Ⅲ期の範囲に収まり7世紀後半。(113) は土師器杯で口径16cmを測る。端部の巻き込みは弱く、体部はヨコナデ調整に拠る。底部調整は不明で、暗文は未確認。(106) は須恵器杯で直立気味の高台が付く。口径16cm。(107) はヘラ切り未調整の須恵器杯底部。(108) は口縁端部が外反する須恵器杯。(109) は口縁部の直口する須恵器杯。口径10.6cm。(105) は縁部の屈曲の弱い須恵器杯蓋で、口径17.2cmを測る。(115) は口径42.6cmを測る大形甕口縁部で、丸味を有



第69図 617-O S 出土遺物 (1/4)

する端面が内外に肥厚している。(114)は製塩土器で、口縁端部が肥厚するのが特徴である。ナデ調整で焼成堅緻。浅黄橙色。以上が8、9世紀の資料である。(111)は平瓦で、凸面には縄目叩き痕が凹面には布目痕が残る。灰色を呈し焼成堅緻。平安時代～鎌倉時代か。(110)は唐津焼塼で、内面と口縁部外面に施釉されている。なお、図版36には中国製青磁(159)を載せている。線描蓮弁文で15世紀後半～16世紀前半。

遺物の主体は8、9世紀の資料ではあるが、唐津焼塼の検出により溝の埋没時期は17世紀中頃におさえられる。溝の埋没は埋土に多量の地山土がブロック状に含まれていることから人為的に埋められた結果と見做せ、8、9世紀資料の包含はその際に当該期の遺構を削平し埋土にあてたことを示唆している。

なお、本遺構の検出面は基本層序第IV層上面で上位には基本層序第II a層が位置する。本遺構はII a層下位の遺構群中最も新しく位置付けられ、本遺構の時期をもってII a層の上限とみなすことができる。

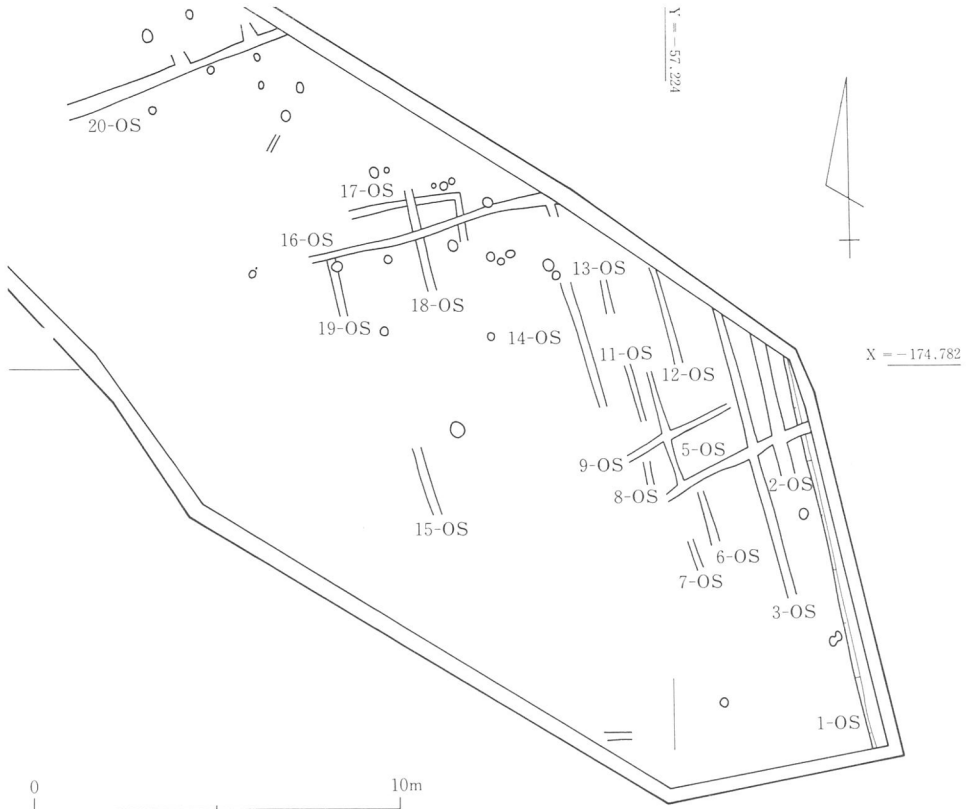
溝Ⅲ類

I A区東部小溝群(第70図 図版2)

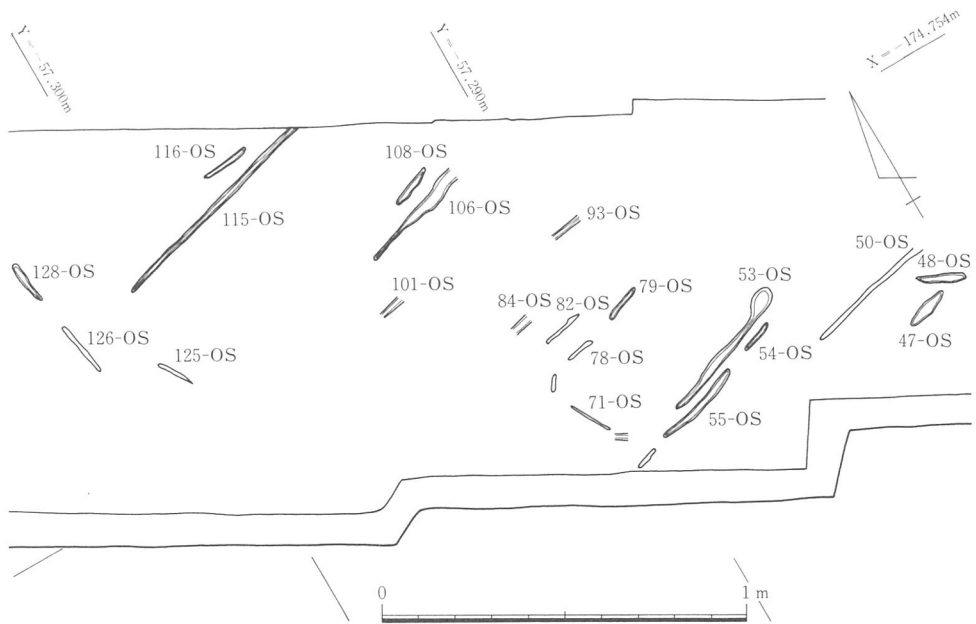
I A区東半で検出した。鋤溝・畝溝等の小溝群で、概ね幅20～30cm、深さ4～5cmを測り、断面は弧状を呈している。方位によりa類(N-70°-E)とb類(N-15°-W)に分けられる。a類には、5・9・16・17・20-OSがある。b類には、2・3・6～8・11～15・17～19-OSがある。埋土は全てオリープ黄砂質土(5 Y6/3)で、上層の基本層序第II b層に共通する。遺物は未検出。

I B区東部小溝群(第71図 図版3)

I B区東半部に位置する。東西26m、南北10mの範囲に分布する小溝群を総称する。個々の遺構は、幅0.1～0.2m、深さ0.03～0.05mを測り、断面は浅いU字形を呈し直線的に延びる。検出長は最大で6.2m(115-OS)を測り、多くは1m前後である。溝の延びる方向は3種類に大別される。概ね東西に向くものは、真北より東に20～21度振る。南北に向くものは真北より西へ10度振るもの(126-OS、128-OS)と30度振るもの(71-OS、125-OS)が認められる。東西に延びるものが圧倒的に多い。両者は分布域を異にしており南北に延びるものは71-OSを除き東半に位置する。東西に延びる溝には、0.2～0.4mの間隔を於て2条が平行して走る状況(116-OSと115-OS、108-OSと106-OS、81-OSと78-OS、53-OSと55-OSおよび54-OS)が認められる。これらは更に約4～5mの間隔を置いて相互に平行し、何らかの区画的機能が想定される。溝の中には、53-0



第70図 I A区東部小溝群 (1/200)



第71図 I B区東部小溝群 (1/200)

Sの様に片方が土坑状に膨らむものがある。遺構の埋土は砂質シルトからなり、色調は暗灰色（2.5Y5/2）と黄褐色（2.5Y5/3）に分かれるが、分布上の差は認められない。

遺物は115-OSから瓦器1片を出土したのみである。埋土は基本層位の第II層に類似することから15世紀以降近世にかけての時期が想定される。

621-OS（図版26・36）

IV D区小溝群を構成する一つの溝である。幅1.5m、深さ0.3mを測る。概ね真北より75度東の方向に延びる。東端で浅くなり2条に分岐することから、複数の小溝が重複している可能性がある。埋土は上層がにぶい黄橙色微砂質土（10YR3/6）、下層が褐色砂質シルト（10YR4/4）である。

遺物は土師器7片、須恵器9片、陶器、磁器各1片を数える。（162）は陶器の鉢で口縁部外面に左上がりの平行叩き目を施す。赤褐色（2.5YR5/6）を呈し径0.5～2mmの白色砂粒と雲母を含む。（163）は磁器の口縁部で表面に透明釉をかける。胎土は明緑灰色（10GY8/1）で近世期の所産と考えられる。

注（1） 本文での須恵器編年は、中村浩「和泉陶器窯出土遺物の時期編年」陶器Ⅲ 大阪府教育委員会 1978に、同じく奈良時代、平安時代の土師器は『平城宮発掘調査報告書』Ⅶ 奈良国立文化財研究所 1986による。

注（2） 森村健一「堺市内出土黒色土器について」『堺環濠都市遺跡』堺市教育委員会 1981

注（3） 水谷寿克 石井清司「篠窯跡群について」『中近世土器の基礎研究2』 日本中世土器研究会 1986

注（4） 近世陶磁器に関しては森村健一氏より御教示を得た。記して謝意を表したい。

第5章 まとめ

今回の調査では攪乱による損傷が著しく、遺構および遺物包含層の遺存状態があまり良好ではなかった。遺構数は約800個を数えるが、出土遺物内容に乏しく時期決定には不明な点が数多く残る。以下、時代ごとに調査成果を概括しておく。

〈縄文時代～古墳時代〉

基本層序第Ⅱ層より縄文時代石鏃1点と須恵器片が得られている。本遺跡から水間鉄道をはさみ西方に位置する石才南遺跡では、弥生時代中・後期と古墳時代中・後期の集落跡が検出されているが、本遺跡では先の須恵器片を除くと遺構・遺物とも皆無で石才南遺跡からの遺構の拡がりとは認められない。

〈飛鳥時代〉

当該期の遺構はⅣD区で検出された落ち込み状土坑637-00のみで、遺構外遺物としてはⅣB・ⅣD区の近世期包含層（基本層序第Ⅱ-1層）に僅かにみられる程度である。従って、後世の削平や攪乱による遺構消失を考慮しても、当該期の遺構分布範囲はⅣB・ⅣD区周辺に限定され、本来的に遺構密度が低かったと推定される。

〈奈良時代～平安時代〉

掘立柱建物、柱穴群、溝、土坑、掘立柱列の遺構があり、当地に古代集落が存在していたことが窺える。時期決定には疑問点も残るが、遺物と遺構の重複関係から確実に奈良時代もしくは先行する時期と判明するのはⅢA区溝347-0Sのみで、掘立柱建物をはじめ遺構の大半は平安時代に下ると推定される。掘立柱建物と土坑の一部には時期比定の可能な資料があり、それらによると少なくとも3時期に区分できると推定される。〈Ⅰ期〉 9世紀前半～中頃。ⅣB区掘立柱建物1006-0Bがある。〈Ⅱ期〉 9世紀後半から10世紀中頃。ⅠB区掘立柱建物1002-0B、ⅢA区西部柱穴群がある。〈Ⅲ期〉 10世紀後半～11世紀初頭。ⅢA区土坑378・379-00があり、隣接する377-00も当該期の可能性が残る。

掘立柱建物は計15棟検出されている。しかし、建物規模の全容が知られるのはⅡB区掘立柱建物1002-0BとⅣB区1007-0Bの2棟のみで、他は調査区外に伸びたりして不十分な検出状況にあり、建物の配置関係などは不明である。ただし、ⅢA区掘立柱建物1003-0BとⅣB区1008-0Bは柱間寸法や柱掘形の配置からみて総柱建物か庇付建物になる可能性が高いと指摘できる。

〈鎌倉時代～室町時代〉

柱穴群・土坑もあるが、遺構の主体は耕作に伴う溝である。先代同様、時期決定は不明な点が残るが現状では下記の2時期に分けられる。〈I期〉 13世紀前半。ⅢB区・C区柱穴群も可能性が残るが、確実な資料はⅡB区溝244-OSである。〈II期〉 15世紀前半～中頃。ⅠA区溝1-OSがある。

Ⅰ期溝244-OSを併走する溝288-OSと一体の遺構（条里坪界溝）とみなすと、現条里条線と約20mのずれが認められることになる。この溝の評価は、今後の周辺調査の成果を待ねばならないが、可能性としては当地における大規模土地開発の始まりを示す資料になりうると考えられる。Ⅱ期溝1-OSは基本層序第Ⅱ-2層の上限を示す資料である。

〈江戸時代〉

前代同様、耕作遺構を主体とする。ⅠB区とⅣD区では、基本層序第Ⅱ-1層に伴う小溝群が検出されている。層位関係から17世紀中葉を上限とする。他にⅣB区から17世紀中頃の溝617-OSと18世紀の井戸588-OWが検出されている。

以上が基本的な土地利用の変遷である。



第72図 現条里地割と中世期区画溝の位置関係図 (1/5000)

第2表 III A区西部柱穴群計測表(1)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 上		出 土 遺 物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
386	隅門方?	(65)	(40)	11		褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト		土師器14 黒色土器5
387	門	38	35	16	22	褐色 (10Y R 4/4) 微砂質シルト		須恵器1 土師器3
393	門?	(23)	(15)	6		不 明		土師器1 黒色土器4
394	楕 門?	37	(20)	3		不 明		土師器1 黒色土器4
395	門	27	26	10		褐色 (10Y R 4/6) 微砂質シルト		土師器9 黒色土器2
396	不整門	78	75	53	20	黄褐色 (10Y R 5/6) 砂質シルト ブロック上	褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト	土師器9 黒色土器5
397	不整門	67	58	25		褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト		土師器7
398	楕 門	(80)	63	23	20	にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) 砂質シルト		土師器4
399	隅門方	80	77	15		褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト		土師器1
400	楕 門	37	32	10		褐色 (10Y R 4/6) 砂質シルト		須恵器1 土師器2
401	楕 門	34	29	16		暗褐色 (10Y R 3/4) 微砂質シルト レキ多い		須恵器2 土師器4
402	門	33	32	19		にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) 砂質シルト 小レキ含		須恵器6 土師器8
404	隅門方	55	34	33		褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト		土師器6
405	隅門方	40	40	33	24	黄褐色 (10Y R 5/6) 微砂質シルト	褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト	須恵器3 土師器17 黒色土器15
406	隅門方	70	(65)	14		にぶい黄褐色 (10Y R 5/6) 微砂質シルト		土師器2 黒色土器16
407	隅門方?	(40)	50	25		にぶい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルト レキ含		土師器3
490	方	40	36	28	22	褐色 (10Y R 4/6) 砂質シルト	褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト	須恵器1 土師器2
491	方	40	34	27	15	褐色 (10Y R 5/6) 砂質シルト ブロック上	褐色 (10Y R 4/4) 砂質シルト レキ含	土師器1
492	門	29	27	12		褐色 (10Y R 4/6) 微砂質シルト レキ含		土師器1 黒色土器2
493	楕 門	43	38	15		にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) 微礫砂質シルト		
494	楕 門	70	48	14		にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) 砂質シルト		
495	隅門方	85	75	17		暗褐色 (10Y R 3/4) 砂質シルト ブロック上		
496	楕 門	37	30	14		褐色 (10Y R 4/6) 砂質シルト		
498	隅門方	78	53	15		褐色 (10Y R 4/4) 微砂質シルト		

第2表 III A区西部柱穴群計測表(2)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 上		出土遺物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
499	円	35	30	7		暗褐色 (10YR 3/4) 砂質シルト		
500	楕円	(40)	28	13		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		土師器 3
501	円	35	32	14		褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
502	隅門方	61	60	14		暗褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
503	楕円?	(25)	(22)	2		不 明		
505	隅門方	67	57	21	20	にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト	黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト	
506	隅門方	67	67	23	20	褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト ブロック土	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	須恵器 1 土師器 2
507	楕円	40	35	15		褐色 (10YR 4/4) 微砂質シルト		
508	楕円	38	32	17	23	褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト	黄褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	
509	楕円	30	25	12		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト レキ含		
510	円	32	30	20	20	暗褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト	暗褐色 (10YR 3/4) 砂質シルト	
511	楕円	35	30	10	17	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
512	隅門方	36	35	20		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト レキ含		
513	円	12	10	— 5		不 明		
515	円	25	25	12		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
516	隅門方	70	52	18	24	褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
517	楕円	(25)	22	5		暗褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト		
518	不整円	(70)	64	12		にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質シルト		
519	楕円	48	36	25		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
520	楕円	(30)	22	25		褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト		
5001	円?	(30)	(15)	2		不 明		
5002	楕円?	(20)	23	7		不 明		
5003	円	10	10	— 5		不 明		
5031	楕円	22	19	14		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト		

第3表 III A区東部柱穴群計測表(1)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 上		出土遺物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
348	隅円方	30	30	28	23	褐色 (10YR 4/6) シルトブロック土	灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト	
351	楕円	21	17	15		にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		
353	楕円	30	24	8	10	にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		製塩土器 1
354	円	25	25	14		にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		須恵器 2 土師器 2
355	不整円	51	32	6		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
356	楕円	61	33	13		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト 炭粒含		
357	楕円	47	41	14		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト 炭粒含		
358	楕円	42	38	7		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
359	楕円	30	22	11		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
360	円	22	22	11		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
361	円	30	27	10	19	にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト 炭粒含		土師器 3
362	楕円	22	13	2		不 明		
363	円	29	24	10		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
364	楕円	25	23	20		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
365	円	30	29	13		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		土師器 1
366	円	30	30	15		不 明		
367	円	30	28	17		不 明		土師器 5
368	円	25	24	9	13	にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		
369	楕円	35	30	25		にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		土師器 5
370	円	26	24	12		にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト		土師器 2
371	円	30	30	16		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
372	円	20	18	5		灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト		
373	楕円	95	60	20		褐色 (10YR 6/4) 砂質シルト		
374	円	25	22	3		褐色 (10YR 6/4) 砂質シルト		

第3表 III A区東部柱穴群計測表(2)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 土		出 土 遺 物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
390	隅門方	(60)	73	18		褐色 (10Y R 4 / 4) 砂質シルト		土師器 3
	門	21	21	5		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 3) 砂質シルト		土師器 5
5004	楯門	26	22	5		褐色 (10Y R 4 / 4) 砂質シルト		
5005	隅門方?	(30)	28	5		灰黄褐色 (10Y R 5 / 2) 砂質シルト		
5006	楯門	43	40	12	20	灰黄褐色 (10Y R 5 / 2) 砂質シルト		
5007	門	36	32	8		灰黄褐色 (10Y R 5 / 2) 砂質シルト		
5008	門	30	29	9		灰黄褐色 (10Y R 5 / 2) 砂質シルト		
5021	楯門	29	25	6	18	にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 3) 砂質シルト		

第4表 III B・C区柱穴群計測表(1)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 土		出 土 遺 物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
412	門	26	26	7.2		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
414	不整門	22	18	12.5		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
415	門	24	24	11.3		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
416	隅門方	34	32	14.4		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
417	隅門方	28	26	9.9		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
418	方	44	40	21.1		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
420	楯門	50	30	18.8		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
421	門	30	26	16.3		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
422	不整門	26	22	9.8		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		
423	不整門	32	30	12.4		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
424	不整門	42	36	11.1		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
425	門	20	20	11.0		にぶい黄褐色 (10Y R 5 / 4) 砂質土		
426	隅門方	28	26	9.7		褐灰色 (10Y R 4 / 1) 砂質土		

第4表 III B・C区柱穴群計測表(2)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋		出土遺物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
427	不整円	40	36	12.1		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
428	隅円方	32	26	14.1		褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土		
429	円	22	20	4.4		褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土		
430	不整円	32	27	9.2		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
431	隅円方	43	38	8.7		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
432	円	20	20	4.0		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
433	隅円方	38	38	17.2		褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土		
434	円	21	21	5.5		褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土		
435	円	18	18	2.4		褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土		
436	隅円方	55	49	9.6		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
437	楕円?	30	29	14.1		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
438	不整円	42	36	25.0		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
439	不整円	22	18	0.7		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
440	隅円方	103	79	29.3		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
442	円	36	35	22.6		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
445	不整円	36	33	18.2		黒褐色 (7.5YR 3/2) 粘土質		
448	楕円	43	35	24.8		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
449	隅円方	32	30	11.9		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
450	不整円	31	24	8.7		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
455	隅円方	41	41	46.3				
456	隅円方	48	43	20.0		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
457	円	27	22	19.5		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
459	円	28	27	14.5		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
460	方	47	43	7.2		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		

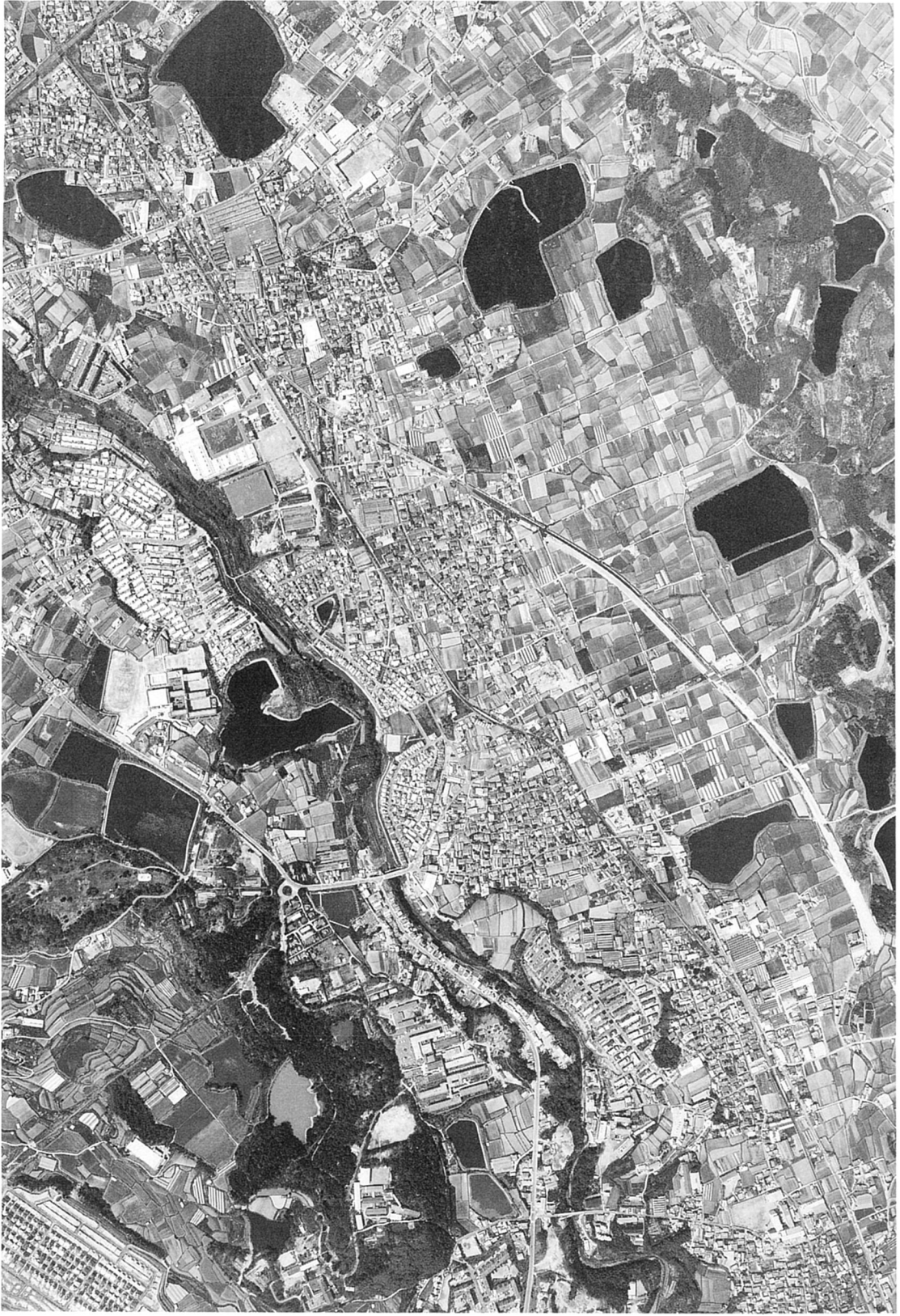
第4表 III B・C区柱穴群計測表(3)

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				理		出土遺物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘	方	
461	不整円	30	28	13.8		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
462	隅円方	41	39	14.7		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
463	不整円	47	44	23.3		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
464	円	17	17	11.9		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
465	円	38	35	25.0		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
466	円	20	21	6.8		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
467	隅円方	41	39	12.4		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
468	楕円	40	30	27.5		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
470	不整円	37	33	7.6		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
471	隅円方	27	27	7.9		にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土		
476	円	28	24	16.7		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
480	不整円	40	38	14.1		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
481	楕円?	(37)	42	12.0		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
482	隅円方	44	41	23.7		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
483	不整円	47	38	23.2		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		瓦器Ⅰ 土師器Ⅲ 1 瓦質土 1
484	楕円	43	34	14.0		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
485	不整円	39	38	17.7		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
486	不整円	39	37	11.2		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
487	円	18	17	12.4		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
488	隅円方	36	35	27.1		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		礎板
853	円	30	30	?		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
854	不整円	45	43	28.9		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
855	隅円方	45	42	27.2		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		
856	楕円?	(34)	(25)	13.5		黒褐色 (7.5 YR 3/2) 粘土質		

第5表 IV D区柱穴群計測表

遺構番号	平面形	法 量 (cm)				埋 土		出 土 遺 物
		長 径	短 径	深 度	柱根径	掘 方	柱 根	
635	楕 円	35	29	15		暗褐色 (10Y R 3/4) シルト		
636	隅門方	56	45	30		にぶい黄褐色 (10Y R 5/3) シルト 炭粒含		
638	円	36	35	17	17	にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) シルト 黄褐色 (10Y R 5/8) シルトブロック含む		
640	楕 円	42	40	12	20	褐色 (10Y R 4/4) シルト		土師器1
641	隅門方	48	35	10		にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) シルト		土師器細片
642	円	38	36	11		にぶい黄褐色 (10Y R 6/4) シルト		
643	楕 円	40	36	15	16	にぶい黄褐色 (10Y R 6/3) シルト		
645	不 明	(35)	?	18		灰黄褐色 (10Y R 4/2) シルト		
647	不 明	24	?	15		灰黄褐色 (10Y R 4/2) シルト		須恵器2 土師器14
648	方	46	33	18	18	にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) シルトと 黄褐色 (10Y R 5/8) シルトのブロック上:		
651	隅門方	37	33	8		黄褐色 (10Y R 5/6) シルト		
652	隅門方	60	47	48	15	にぶい黄褐色シルトと黄褐色 (10Y R 5/6)) シルトのブロック上:	にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) シルト	須恵器1
960	不 明	(45)	?	24		灰黄褐色 (10Y R 4/2) シルト		須恵器
5009	隅門方	38	38	6		不 明		
5010	不 明	(42)	?	12		灰黄褐色 (10Y R 4/2) シルト		

圖 版



清見遺跡周辺（木嶋谷）空中写真（上方が北）